

横浜市・地域日本語教室事例発表会
(2013年(平成25年)1月19日開催)
報告書



2013年3月
公益財団法人横浜市国際交流協会

はじめに

横浜市では、2010年度より、横浜における日本語学習支援システムの構築に向けて、幾つかの事業に取り組んでいます。「横浜市・地域日本語事例発表会」もこの一環として開催され、今回が2回目になります。

横浜市においては、1990年以降、ニューカマーと言われる外国の方々が急増しました。2009年8月に外国人登録者数は8万人を超え、ピークを迎えましたが、その後、リーマン・ショックや東日本大震災の影響もあり、2012年12月の外国人人口は、7万5,099人となっています。これは、横浜市民の50人に1人が外国人という状況になります。この間、横浜市、神奈川県において、住居や医療、行政窓口等への通訳派遣、多言語による相談窓口の設置など、さまざまな分野での外国人支援、あるいは多文化共生のまちづくりが進められてきました。とりわけ日本語の学習支援においては、地域の日本語ボランティアの方々を中心とした取り組みが行われてきました。

2011年に当協会が実施した調査によると（注）、横浜市内には95の団体の日本語グループがあり、約2,000人の方々が支援活動に携わっています。課題としては、「日本語ボランティアが足りない」、「会員が定着しない」、「学習者が来たり来なかつたり変動が激しい」、「学習者のニーズが多様で対応し切れない」、などがあり、また「ボランティアの資質向上の場が欲しい」などの要望もあげられました。一方で、これらの課題に対して工夫を行っている団体や、教科書ではなく日常会話を中心とした活動や生活に役立つ情報を積極的に提供するなどの活動を行なっている団体もあります。これら、ほかの日本語教室の状況がお互いにかかるような、開かれた場があれば、というような要望もあります。

本発表会では、基調講演および3団体の事例発表やディスカッションを通して、「親子子育てサポート」「外国人・日本人相互の学びあい、協働」「学習者の選択肢を拡げる、連携」などをキーワードに、「多文化共生のまちづくりを目指した日本語学習支援」のありかたについて、会場参加者とともに考えました。同時に、参加者同士が知り合うような場づくりも目指しました。

この報告書が、横浜におけるこれからの日本語教育のあり方について、また、行政・公的機関・日本語学校・ボランティア団体など、日本語教育に携わる機関・団体間の連携や、ネットワークの構築に向けて考える機会となれば幸いに存じます。

最後に、本発表会にご協力・ご参加いただいた皆様に改めて御礼を申し上げます。

（注）「地域日本語教室調査報告」（「横浜市・地域日本語教室事例発表会報告書」2012年3月）による

2013年 3月 公益財団法人 横浜市国際交流協会 ^{ヨーク} (YOKE)

目 次

はじめに

目 次

発表者の紹介	4
第一部 基調講演	6
「誰もが安心して生老病死がおくれる地域をめざして ～多文化共生のまちづくりをめざす日本語教室を考えよう～」	
講師：春原憲一郎 氏	
(財団法人海外産業人材育成協会(HIDA)理事兼AOTS日本語教育センター長)	
第二部 事例発表・パネルディスカッション	20
1. 日本語学習支援に関わる市内3団体による活動事例発表	
ファシリテーター：矢部 まゆみ 氏	
(横浜国立大学非常勤講師・YOKE 日本語学習コーディネート業務アドバイザー)	
(1) 特定非営利活動法人国際交流ハーティ港南台	22
(2) ラテンアメリカ青少年の会	27
(3) 横浜 YMCA 学院専門学校日本語学科	32
2. 講師をまじえたディスカッション	37
第三部 会場ディスカッションとまとめ	47
ファシリテーター：矢部 まゆみ 氏	
参考資料 「多文化共生」の定義	59

横浜市・地域日本語教室事例発表会 概要

日 時 : 2013年1月19日(土) 13:00~16:30

場 所 : 波止場会館

主 旨 : 地域日本語教室のネットワーク構築を目的に、地域日本語教室の特徴的な取り組みをテーマ別に紹介し、多文化共生のまちづくりをめざす日本語教室の役割について考えます。

参加者数 : 78名

主 催 : 公益財団法人横浜市国際交流協会(YOKE)

横浜市政策局の委託により実施

発表者の紹介

講師・ファシリテーター

講師：春原憲一郎氏

(財団法人海外産業人材育成協会 (HIDA) 理事兼AOTS日本語教育センター長)

海外からの技術研修生や医療・福祉従事者への日本語教育に携わるほか、地域社会における多言語・多文化問題の分野でも幅広くご活躍されています。

ファシリテーター：矢部まゆみ氏

(横浜国立大学非常勤講師/YOKE日本語学習コーディネート業務アドバイザー)

横浜国立大学において、留学生の日本語教育などを担当。またYOKE日本語学習コーディネート業務アドバイザーとして日本語学習支援訪問相談などをお願いしています。

発表団体（五十音順）

◆特定非営利活動法人国際交流ハーティ港南台

1992年に外国人に暖かい心で接していきたいという想いで会を発足しました。外国人、日本人みんなでボランティア活動をする。そのためには日本語も必要であるという考えで日本語教室を立ち上げました。

◆ラテンアメリカ青少年の会

13年前に、日本にいる中南米人の子ども達をつなぐ活動をしたいと思い、月1回の交流会を始めたことをきっかけに、子供たちへの学習支援として活動を開始しました。また、成人を対象とした日本語支援を3年前に開始しています。

◆横浜YMCA学院専門学校日本語学科

1988年日本語学科を開設。2008年より「日本語短期集中コース」を開始し、ビザに関係なく学びやすい環境を提供しています。また、「YCJサポーター」制度をとおして地域貢献・相互理解を促進しています。(※YCJ…「Yokohama YMCA College Japanese school」の略称。日本語学科に在籍する学生を様々な形でサポートする制度)

第一部
基調講演

基調講演

「誰もが安心して生老病死がおくれる地域をめざして
～多文化共生のまちづくりをめざす日本語教室を考えよう～」

講師：春原憲一郎 氏

(財団法人海外産業人材育成協会 (HIDA) 理事長兼AOTS日本語教育センター長)

○司会 それでは第1部、基調講演に入ります。ここで本日のご講演者、春原憲一郎先生をご紹介します。春原先生は現在HIDA、財団法人海外産業人材育成協会理事、及びAOTS日本語教育センター長を務めておられまして、海外からの技術研修生や医療・福祉従事者への日本語教育に携わるほか、地域社会における多言語、多文化問題の分野でも幅広くご活躍されています。本日の演題は「誰もが安心して生老病死がおくれる地域をめざして～多文化共生のまちづくりをめざす日本語教室を考えよう～」です。

それでは春原先生、よろしくお願いいたします。

○春原 春原です。よろしくお願いいたします。
会場を見るとよく知っている顔がたくさんあって、私のきょうの話も、もう何度も聞いているという方がいらっしゃるかと思います。ただ、今度の3月11日まではこの話をし続けようと思っていますので、ぜひ復習のつもりで聞いてください。

今日の私の話は、どうやって新しい地域をつくっていきけるかというようなこと。そのためには障害者や高齢者や外国人も含めて、キーワードを1つ言うとしたら、安心して暮らせる地域をつくっていきこうというようなことについてお話をしたいと思います。

初めにちょっと、ぱっと2人になってもらえますか？ どうぞ。どうしても奇数になったら3人でも結構ですが、ぱっと2人になってもらえますか？ よろしくと、ちょっとお隣か後ろの、前後の方によろしくお願ひしますと、ちょっと言ってください。これは国内外、今はどこで頼まれてもここから始めるのですが、ちょっとそこで会話をしてもらいたいのですが、片方の人がお父さんかお母さん役で、もう片方の人が高校2年の娘の役。じゃあ私は高2の娘、私はお父さんかお母さんと、ぱっと決めてください。3人のところは両親と娘。

では、親と娘役を決めていただいたら、親役の方が、まず娘に向かって「おい、おまえ。最近、体のぐあいが悪そうだな。どうしたんだい？」と聞いてください。そんな乱暴な言葉を使わなくてもいいのですが、「おまえ最近、体の調子が悪そうだな、どうしたんだい？」



基調講演 春原憲一郎氏 (写真)

と相手に聞いてください。そうしたら娘は「ちょこっと妊娠しただけよ」と、しらっとした調子で答えてください。そうしたらその後のお父さん、そして娘の会話は即興で真剣につくってください。よろしいでしょうか。ある日の、週末のお茶の間。娘は向こうを向いている。お父さんが「おい、おまえ、最近……」。じゃあ、用意スタート。

[約1分 会場、ロールプレイング]

○春原 はい、こんなところで結構です。このエピソードもいつも紹介するのですが、これをやって一番今まででおもしろかったのは、フランスのパリの郊外の大学でやったときで、そこでフランス人の日本語の先生とスリランカ出身の日本語の先生がいて、「おい、おまえ。体のぐあいが悪そうだな。どうしたんだい?」と聞いたら、スリランカ出身の日本語の先生が「ちょこっと妊娠しただけよ」と言うと、お父さん役が「相手は誰だ?」と聞いたら、「パパの会社の社長」というのが一番今まででおもしろかったのですが。これのもとネタは何かというと、3.11の後の3月16日に、当時の枝野官房長官が、福島第一原発事件があって、20~30キロ圏内で放射線量のモニタリングの結果を発表した。そのときの言葉が「直ちに人体に影響の出る数値ではありません」というのが世界中に流れた。そのときにオーストラリアのシドニーに住んでいる森巢博という小説家で論客で、本業は国際的ばくち師という、森巢博という人。多文化とか多言語に関心のある方は、ぜひ森巢博の『無境界家族』という、キョウカイというのはボーダーの境界ですね、『無境界家族』というのが出ていますので、ぜひお読みになると、とっても参考になります。その森巢博がオーストラリアでこの報道を聞いて、直ちに人体に影響の出る数値ではありませんと聞いて、安心する国民がいるのだろうかということを新聞に書いていて、そのときに森巢博が、それはちょうど家庭の中で自分の娘が「ちょこっと妊娠しただけよ」と言って安心する親がいるだろうかということと同じことじゃないかと彼が新聞に書いていて、ああ、これは使えると思って授業とかこういう場で使わせてもらっています。

もう一回だけちょっと遊びたいと思います。今度は片方がやっぱり親の役。もう片方が娘と結婚の約束をしていた男の役。その親の娘と結婚の約束をしていた男の役。片方は娘の親。娘はいない。その娘と結婚の約束をしていた男の役。ではちょっと、役柄だけぱつと決めてください。

では役柄が決まったら、切り出しのせりふはこう言うのです。「おまえ、娘と絶対に結婚するって約束したじゃないか。」と言ったら、その男が「結婚の約束については、結婚の約束をしなかったか」というと否定できない側面もあるんですが、はあ……。」と、もぞもぞという感じで答えてください。そうしたら、その後は即興でつくってください。「おまえ、絶対に娘と結婚するって約束したじゃないか」。いいですか。それでは用意スタート。

[約1分 会場、ロールプレイング]

1) 伝わらないこと、わからないこと

○春原 はい、こんなところで結構です。これの元ネタは、原子力の安全神話について先生はどう思われますかと聞かれた、東京大学の原子力政策を進めてきた某斑目という教授が「原子力の安全神話については、安全神話がなかったか」というと否定できない側面もあるのですが……。」と答えて、何を言っているの、おまえ、それ？ こういう、特に3.11以降、何を言っているのか日本人でもよくわからないような、そういうような日本語、報道というのが多々流された。このことと、今、日本語支援の世界で、やさしい日本語というようなことがよく言われる。これは恐らくどこかでつながっている。そして、長田弘という詩人がこういうことを言っていて、「言葉の貧しい人は貧しい。言葉を豊かにできる人は豊かだということを忘れないようにしたい。そうでないと、私たちは自分たちの頭を自分たちが信じてもない言葉のがらくたでいっぱいにしてしまいかねないからです」と言って、恐らく言葉は2つの働きをしていて、1つは人と人を結ぶ働きをしている。もう1つは、今も世界中で起きているけども、言葉一つで人と人を切ることができる。切断することができる。恐らく貧しい言葉というのは人と人の関係を切っていく言葉で、豊かな言葉というのは人と人の関係を作っていく、けんかはしても豊かな関係をつくっていく。そういうような豊かな言葉というのをできるだけ使っていきたい。そうでないと、本当に自分の頭の中というのが人と人を切るような言葉でいっぱいになってしまうというような気がします。そういったことは日本人同士でもできるだけ、英語で言えばcomfortable Englishという言葉があるけども、恐らくやさしい日本語、平易な日本語というのは、公の場で相手の胸にすんと落ちていくような、そういう言葉を使えるような教育というのを、日本人だろうが外国の方だろうが、していく必要があるだろうなという気がします。

2) グローバリゼーションの第4/最終段階:ひとの移動 HOMO MOVENS(ホモモーベンス)の世紀

さて、ここから本論に入りますが、今、大学関係の人の中で前門の虎、そして後門のオオカミというようなことを、今、全国に放送大学などの通信制の大学も含めて786の大学があります。786の大学が、今、前門の虎として少子高齢化という問題、それから後門のオオカミとしてグローバル化という問題。恐らくこれは大学だけの問題ではない。企業もそうだし日本社会そのものが、恐らくこの少子高齢化とグローバル化という課題に直面している。この問題をどう考えていくかということと、今日の、恐らくキーワードである多文化が共生、共存していく地域社会をつくっていくということが直結しているだろうという気がします。

このことを考える上で、人口動態について一つ押さえておく必要がある。2011年の10月31日に、世界の人口が70億を突破したというのは話題になりました。ただ、この中で人口がふえているのは発展途上国だけです。96%は発展途上国でふえている。さらに2011年の70億ということよりももっともっと大きなことは、2008年の、人間が農耕を始めて、今、

1万5000年たっている。中国の長江の流域で農耕が1万5000年たって初めて、人類史上初めて、農村・漁村の人口を都市の人口が上回ったということのほうが、恐らくはるかに大きい。都市の人というのは2つのこと、1つは、都会は寄せ集めですよ。吹きだまりですよ。どこから移動してきた人たちが集まっているという意味で、常に移動することを生活の基本としている。2つ目は、農村や漁村のように生産をすることが中心ではなく消費することを中心としているという、この移動と消費というのをなりわいとする人たちが、生活の基本とする人たちが、今、2人に1人以上になってきている。そういうのを指して、社会学者はホモモーベンスの世紀という、モーベンスというのはムーブ、動く。移動するというのをライフスタイルの基本としている、そういう時代に入ったとあって、それを情報、お金、物、そしてグローバル化の第4段階として人の移動が本格化してきたということを行っています。まさにそういう中に今の日本の地域社会というのはあって、その中で日本人、外国人にかかわらず、移動するというので、移動しても安心して、安全に暮らせるような地域をどうやってつくっていくかという問題、そのところは言語や文化や社会制度をどうつくっていくかという問題と直結していると思います。

3) ひとの移動と労働者の階層化：ブラジル奴隷制度廃止1888年 ⇒笠戸丸1908年

今、新移民の時代だというようなことを国連で言います。その始まりは1997年のコフィ・アナン事務総長の時代。アナンが移民の定義を変えようと、かつての移民という言葉が持っていた、自発的な移動ではなくて人から強制されて移動するというイメージ。例えば日本の19世紀の末から、ハワイとか南米とか、もしくは中国とかに移動していった人たち、その人たちは多くの部分が非自発的な、強制されて、貧困とか冷害とか飢饉とかで半分強制されて移動した人たち。移民というイメージが今でもあるけれども、しかし97年にアナン事務総長が、いや、移民というのは、もう今は違うだろう。これだけ移動を中心とした生活を人がしているからには、移民の定義を変えなきゃいけないと言って、移民というのは、自分が生まれ育った国を離れて、そして12カ月以上ほかの国で暮らしている人たちを移民と呼ぼうと言って、そのときに12カ月という定義が非常に大きな波紋を呼んだ。だって12カ月は1年じゃないか。

この中で移民経験のある方は手を挙げてください。恐らくもつといるんじゃないかな。12カ月以上ほかの国、地域に行ったのを移民と呼ぶ。じゃあこの中で、今、自分が住んでいるところが、自分が生まれ育ったところではなく、かつ12カ月以上、今いるところに数でいるという方は手を挙げてください。皆さんは国内移民ですよ。国内移民。今、日本は、シリアとかアフガニスタンと並んで、国内移民問題を大きく抱える国の一つになってしまった。福島から山形へ、福島から新潟へ、福島から埼玉へ、沖縄へという形で、大量の国内移民を出している国の一つですよ。そういう中で子供の教育の問題であったり、仕事の問題であったりというのが発生している。ただ、それを国内移民の問題だという捉え

方が国としてどこまでできているかというのは、甚だ不安なところがあります。そういう新しい、人類70億、誰でもが移民になり得るといような時代に、今、いるのだということ、それを踏まえて地域社会をつくっていく必要があるだろうという気がします。

4) グローバルな移民社会：「移民」の定義 内政不干涉から内外国人平等へ 1997年

誰でもが移民になりうるということと、もう一つ、国境を越えて移動する人たちに変化が出てきている。それは、かつては生産労働に従事する人たちの移動、もっと言うと、製造業に従事する男性の移動というのが国際移動の主流をなしていた。それが、今、再生産の仕事、仕事だけではなくて再生産の営み、これは人と人がかかわるといような営み。世界194の国で人と人が直接かかわる仕事にかかわっている大多数は女性なわけです。この女性の国際間移動というのが、今、本格化してきている。日本でいえば2008年から始まったインドネシアの看護、介護士の人たちの受け入れ。2009年からフィリピン、今年からベトナムが始まっているといような、そういう看護、介護であったり、もしくは結婚移民と言われる人たち。こういう人たちの移動というのが、今、本格的に地球規模で始まっている。上野千鶴子さんは、再生産労働というのは、産み、育て、養い、みとるは仕事だねとおっしゃっていますが、この産み、生まれ、育て、育ち、養い、養われ、みとり、みとられ、死しては悼み、悼まれるという、人類70億、誰でもがたどる人生行路。これに直接かかわる人たちの移動というのが、今、本格化してきている。先日、国際移住機関、IOMの上席アドバイザーという人と話していたら、移民にはいろんな移民がいる。労働移民、それから家族移民、それから結婚移民、それから留学生、外交官。いろんな種類の移民がいるけれども、最も多いのは家族移民だそうです。移民の45%は家族移民。それに結婚移民を加えると圧倒的にこの再生産、人の命にかかわる営みをする女性の移動というのが、今、本格的にふえていということが言えると思います。そうすると短期間の、機械を前にして物をつくっているといような仕事にかかわる人ではなくて、人と人が直接かかわる、それもトランジットではなく、中長期、もしくは一生かかわっていくといような、そういう人たちが国境を越えて、言語と文化を越えて、今、移動している。そうすると、今までのトランジット、もしくは専門家を対象としたような言語支援、文化支援、社会支援ではなくて、中長期もしくは一生、一緒にかかわっていく多様な言語・文化を持った人たちがどうやって社会をつくっていくかという発想で考える必要がある。

今度の4月にフランスで行われる日本語のシンポジウムのテーマが、「接触から協働へ」というテーマで行われる。今までは接触場面といので考えていけばよかった。そこでのキーワードはインターアクション、相互行為とインターアクションとコミュニケーションというテーマでよかった。しかし今は、単に接触場面だけではなくて、中長期、一生にわたって一緒に暮らしていく、もしくは一緒に働いていくという、そういう場をどうやってつくっていくか。そして接触から協働、協力して働く。コ・アクションとか。コとい

は一緒に。コ・アクションとかコ・ワークとか。そこでのキーワードがインターアクションではなくてコ・ワーク。コミュニケーションではなくてネゴシエーションというような、そういうような言葉をキーワードとしてシンポジウムをしますというお知らせが来ました。日本も韓国もEUも東南アジアも、今、恐らくそういう、人がたまたま短期間移動するという発想ではなくて、もう既に多様な人たちが常に移動し続けていて、そういう中で少子高齢化とグローバル化というものを両足に据えて、どうやって地域をつくっていくかというのが世界的な課題になってきている。

5) 生産労働から再生産労働へ『おひとりさまの老後』2007年

その一例として、日本は今、人類史上最大の実験と言われる少子高齢化の問題にぶつかっている。一時1.26人という特殊合計出生率で、今は1.37。1.5を割った国で、右にある人口置換水準というのは人口の自然増、自然にふえる、自然に減るバランスを保てるのが2.07から8と言われている。かつ、1.5を割った国で人口置換水準、自然増、減のバランスまで復帰した国は今まで一つもない。フィンランドもフランスも1.5を割っていない。この1.5を割った時点で日本がどうやって少子高齢化の問題に直面していくかというのを、今、世界中の人口動態の研究者が注目している。3.11のときに、今、日本国内に自治体というのが1,743ある。この1,743の自治体の1,000以上が、高齢者が30%以上と言われる高齢化地域、高齢化自治体になっている。3.11のときに、特に超高齢化地域の女川や陸前高田や大槌町というのが、東日本の自治体の中でも最も死者、行方不明者を出し、さらに生産年齢の人たち、そして、事件後に大量の母子の流出、そして自治体そのものの機能の消滅というのが起きている。そうすると、阪神・淡路のときには働く人と働く場というのは残っていたから、復旧は復興につながっていった。復旧することは復興につながっていった。しかし、今ここに挙げられているような地域というのが、復旧はできるかもしれない。しかし復旧が復興につながっていくかどうか。働く人も働く場も消滅したところで復興をどうするかという問題が非常に大きい。そうすると少子化、もしくは少子高齢化という問題は、実は、それでもいいよねと言っているかどうかというのを、こういうような災害非常時に大きな問いを突きつけてくると思います。そうすると、国境とか言語とか文化で限った、閉めて、閉ざしているということとはできない。どうやって魅力のある地域をつくっていったって、いろんな言語や文化を持った人たちが来てくれるような地域社会をつくっていけるかというのが大きな課題になってくると思います。

6) 労働力の女性化から移動の女性化へ：いのちのしごと

恐らく、今、1,600人ぐらい、インドネシア、フィリピンからEPA（経済連携協定）によって看護師、介護士の人たちが来ていますが、そういった人たちが、先ほどの話に戻ると、単に数年ではなくて10年、20年というスパンで日本にいとすると、何が問題かとい

うと、一つは、日本社会は何をするにも資格が必要なのですよね。資格を取るということが必要。そうでないと3Kの仕事とか半端な仕事とか周辺の仕事しかさせてもらえない。何かしようと思ったら資格を取ったり研修を受けたりしなければいけない。そのためにはリテラシーが必要になってくる。読み書き能力というのが必要になってくる。それも単に平仮名・片仮名ができますというレベルではなくて、資格試験や検定試験というのを受けるだけのリテラシー、読み書き能力というのが必要になる。そういうのを、どうやって日本語支援、もしくは日本語教育の場で、特に10代の留学生はまだいいかもしれないけども、20代、30代。今来ているインドネシアの人たちの平均年齢は28.5歳。フィリピンの人たちは32.5歳。国に子供を置いてきている人も大勢いる。そういった非漢字圏でゼロから日本語を勉強する人たちはたくさんいる。そういった人たちがどうやって私たちと同等に近いようなリテラシーを身につけていけるかというのが、今、大きな課題ではないかという気がします。

これ(図1)は昨年の3月10日に恐らく日本で初めてやった、外国人看護、介護福祉士の人たちのためのスピーチコンテストというのをして、これはなぜやったかという2つ意図があって、1つは励ましたいということと、もう1つは日本の医療現場や介護現場というのが、外から来た人たちの目にどう映っているのかというのを日本人に向けて発信してほしいというような意図があって、しました。その中にこういったようなスピーチがありました。ブラジルから来た人のスピーチで、5年前に日本に来て、そして4年間自動車工場に働いていた。その間に日本語を学びたいと思っていたけれども、覚えなくていいと現場リーダーからずっと言われていた。だからここでは、自分は人間として見られていないと感じていた。そして外国人だからよくいじめられた。でも少しだけ勉強したけども、もっと勉強したいと思っていた。そこに3.11があって生活の全てが変わって、首になって、多くが国へ帰った。どうしようかと思っているときに、介護の仕事、ホームヘルパーの仕事が来た。今、2級を取ろうと思って初めて書き言葉の勉強をしているというような、そういうようなことでした。ここにあらわれているのは、まさに一番最初の、生産労働から再生産労働への移行ですね。生産労働をしているときに、機械を前にして物をつくっていた。日本語を学びたいと思っても学ばなくていいと言われて、言語から疎外されていた。日本語という言語から疎外されていた。学ばなくていいというのは学習から疎外されている。そして人間として見られていない、いじめられたと思った。まさに人間関係、社会から疎外されているというような、こういう2重、3重、4重の疎外の構造というのがあって、それが今度、再生産の営み、人の命に

**第2回にほん語スピーチ
コンテストのチラシ(図1)**

かかわっていく介護という仕事について、そこで、まさに日本語を学ぶということが肯定的に捉えられる現場に入った。そしてぶつかった問題というのが、ヘルパー2級の資格を取らなければいけない。そうすると、読み書きをしなければならないというようなニーズにぶつかって、彼女は今、読み書きの教室に通っている。介護という分野や看護という分野で、まさに識字能力、新たな識字能力というのが出てきている。識字の問題というのは、今、資格や、そして何よりもメールというものをめぐって新たなリテラシー、読み書き能力のニーズ、必要が生まれてきているというのが現実だと思います。そういったことを踏まえて、今、恐らく一つの地域社会だけではなくて世界中が、よく言えば柔軟に、流動的になってきている。悪く言えば非常に不安定になってきているというのが現実ではないかという気がします。

7) 単線/リニア型人生 から 螺旋/スパイラル型人生へ

最近、威勢のいいことがなかなか言えなくなっていて、一方で回転ずしとかを見ると非常に飽食化が進んで、食べ物を捨てるというのが普通になっている。もう一方で、この豊かな日本においても餓死というのが起きている。それも独居老人の餓死ではなくて、兄弟とか姉妹とか、もしくは親子で餓死をするというようなことが現実起きてきている。今、世界で最も高学歴化しているのは韓国で、大学進学率が89%というような、すごく高学歴な国、地域もある。一方で大学生の低学力化と高学歴者の就職難とワーキングプアという問題が起きている。日本でも安倍政権になって、今、教育の議論というのが教育再生とかと、非常にかまびすしく行われているけれども、OECD34カ国の中で、日本の国家予算の教育にける割合というのは34カ国中34位。最も低いのですね。というような現実がある。そうすると、以前だったら非常にわかりやすい構造があったのだけでも、今というのは非常に流動的でわかりにくい状況になってきているという気がします。それに伴って、今、人生行路、人生のあり方というのが単線型の、徐々に人は成熟していくよねという見方から、スパイラル型の、らせん形の、常に成長を強られるというような、そういう社会になってきている。リニア型というのは生徒・学生の時代があって、社会人になっていって、年功序列と終身雇用に守られて老後は年金生活をする、と、極めてわかりやすい人生行路というのがあった。しかし今、特に経団連が1995年以降、柔軟な雇用形態ということを書いたのが象徴的ですが、学生であってもインターンシップという形で働きに出るといことをしなければいけない。社会人になったって延々と自己啓発とか自己研修とか社会人大学院とかという形で学び続けなければならない。せつかく定年退職したって余剰労働力とか言われて、年金もあげないと言われて働き続けなければならない。こういったことを私は、終わりのなき学習と終わりのなき就活という言い方をしているんですけど、こういう、人の生き方そのものというのが極めてわかりやすいサイクルから、常に学んで、常に就職をしてというような、そういうらせん型の生き方というのが奨励される

という、そういう社会になってきている気がします。そうすると極めて能力主義的になってくる。企業も学校も地域社会も、そして家族も国も個人も人も。どうやって生き延びていくか、生き抜いていくかという競争にさらされているけども、でも国境を越えたら言語は違う、文化は違う。さらに年をとったら記憶力は衰える、体力は衰えるというという、常に変化にさらされている。そうすると、新しい言語や文化や社会性というのを獲得していける保証と同時に、能力が落ちて、体力が落ちて安心して暮らしていけるという保障、この2つの保証・保障というのを地域がしっかりやっていくということがこれから必要なのではないかという気がします。

今までの話をまとめると、97年の、12カ月以上という新しい、人類誰でもが移ろい住む民という時代になって、一時滞在のまれ人、客人というような立場から、常に誰でもが移ろい住む住民としてここにいるという時代になった。言語支援とか言語教育でいうと、恐らくこの半世紀以上、英語教育を中心とした言語教育というのは、どこかに、しかし圧倒的にオーラル・コミュニケーションを中心としてきた。コミュニケーション中心。本当は、その中には読み書きも絶対に入っているのだけでも、でも、恐らくオーラル・コミュニケーションを中心とみなしてきた。だからこそ、全国に浜の真砂のように英語学校はあるけれども、それを英会話教室とか英会話学校という言い方をするのも、恐らくオーラル中心で来ていたから。でも、今言ったような資格や、それから十分に社会でかかわっていく、そして何よりも、コミュニケーションが、目の前にいる人とできえメールでやるというようなコミュニケーション形態というのが普通に行われている中で、新たな読み書き能力をどうやって身につけていけるかということが、ひいては社会参加の能力というのをどうやって身につけていけるかということとつながっていく気がします。

8) おしゃべりから/とリテラシーへ：「漢字」という課題 例「嘔吐」日野原重明

リテラシーの問題でいうと、欧米に追いつけ追い越せというような時代の、古典を中心に、辞書と文法書を持って読み解くというリテラシーのあり方と、それから20世紀を牽引したブラジルのパウロ・フレイレの、まさに人権運動として、特に南の諸国の女性のエンパワメントとしての識字運動という第2ステージがあって、今起きているのは、人類70億、誰でもが移動する、そういう中で世界を読み解いていって変化をしていく、移動していく。そしてグローバルなデータベースにアクセスをして使いこなしていくというような、そういうリテラシーですね。そういうリテラシーをどうやって身につけていけるかというのが、今、リテラシーにおける、広い意味での読み書き能力の課題としてきていると思います。上野千鶴子さんは、日本語という言語は非関税障壁である。税金はかかっていないけども日本に入る障壁になっているという言い方をしています。

外国人看護師の日本語支援をしている日本語教師の人から教わった、このようなこと（図2）を日本語のあいいうえおから始めて8カ月ぐらいたったインドネシアの看護師の人たちが、今、病院で勉強している。一番右の言葉はこの5年間ですっかり新聞、雑誌に取り上げられて有名になってしまったのでわかると思うのですが、残りの3つはどういう意味でどういう漢字かというのは、おわかりになりますか。ちょっとお隣の人と15秒、わかる？って聞いてください。

「日本語は非関税障壁である」
(上野千鶴子)

きつぎゃく がんそう がいそう じょくそう

吃逆 含漱 咳嗽 褥瘡

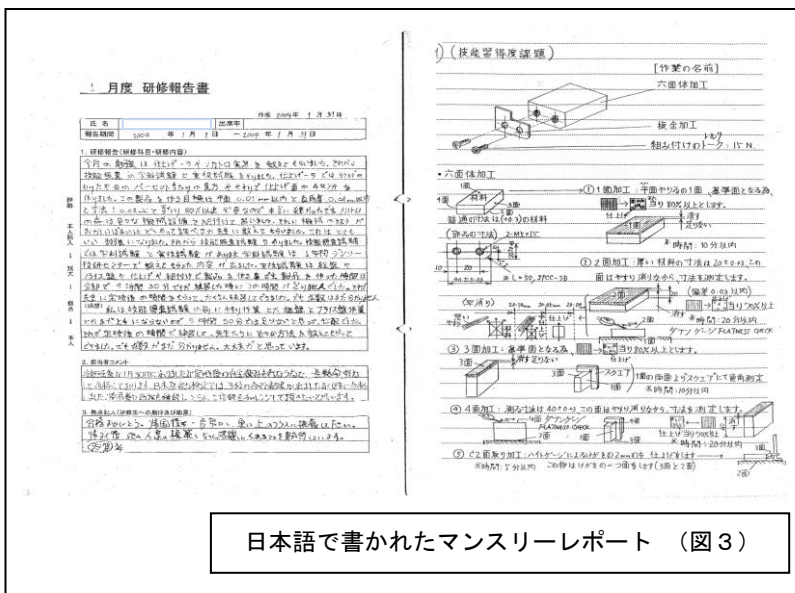
しゃっくり うがい せき 床擦れ
ガラガラペーッ! bed sore

(図2)

「キツギヤク（吃逆）」はこういう字ですね。吃水線の吃に真逆の逆。「ガンソウ（含漱）」は含むに夏目漱石の漱。「ガイソウ（咳嗽）」は咳にくちへんの嗽。「ジョクソウ（褥瘡）」はころもへんに辱めるに、やまいだれに倉庫の倉。さて、どういう意味でしょう。中国語がわかる人はもしかしたら想像がつくかもしれない。漢字を見ると想像がつきますよね。吃逆はしゃっくり。含漱は含んですすぐだから、まあわかります。咳嗽のガイは咳だからわかりますし、褥瘡は、床ずれですね。そのときにインドネシアの看護師候補者の人から質問が出たのですよ。含漱という言葉は患者様にも使いますかって。そうしたら、看護部長の方がこう答えたのですね。「がらがらペッ」と言いますねと答えたという。例えば、この褥瘡という言葉は英語で言えばbed soreという言葉であって、bed soreという言葉一語を覚えれば国家試験だろうが専門家同士だろうが患者、家族だろうがそれで済む。でも日本で国家試験を受けようと思ったらこの褥瘡という漢字を覚えて床ずれだと覚えて、それぞれどう書く、どう読むというようなことを覚えて。そして誰にはどの言葉を使うかという使い分けまで覚えなければならない。そうすると、ヘレン・ケラーは三重苦だけど、非漢字圏日本語学習者は四重苦、五重苦というような、そういうような学習の負荷というのを負っている。もう少し深く考えてみましょう。今の褥瘡の褥という字と生という漢字はどちらが難しいと思いますか。もちろん褥ではないですね。褥だったらこういう質問は出ない。褥は実に簡単なんですって、この漢字は、と、インドネシアとフィリピンの看護国家試験の準備をしている人たちは言うのですって。褥なんてとっても簡単だ。なぜか。国家試験に出てくるのは3つだけです。褥や産褥というのは出産を控えた女性が寝ている布団のことですね。そうすると、長いこと寝ていると褥瘡という床ずれが起きる。寝ている婦人のことを褥婦と言う。この3つ。ザッツオール。これ以上はない。だからこれは固有名詞、人の名前や地名など、相撲取りの名前を覚えるのと同じ。把瑠都ってこういう漢字だ

ね。闘莉王ってこうだねと、見てわかれば終わり。これ以上はないですね。ところが生という漢字。生という漢字は一例を挙げるとこうなるのですね。生憎、生きる、生まれる、生い立ち、相生町、生成り、生粋、生涯、生活、生ビール、生える、壬生義士伝、羽生名人とか。一例としてこれだけ出てくる。しかし生は本当にベーシック漢字の中のベーシック漢字ですよ。そうすると、教えたほうは教えたつもり、教えたはず。しかし、異なる読み方、異なる品詞、異なる意味、異なる用法で延々と出てくると、そのたびにボキャビルをしなければならない。こういう言葉でルールはほぼない。こういった言葉をどうやって獲得していくかという際の支援の仕方、教育の仕方というのは違ってきます。そうすると、リテラシーのもとになる、まず語彙を獲得していくということ一つをとっても、日本人にとっての難易度という問題と、それから日本語を成人してから学ぶ人たちの視線、彼らの難易度というのが違ってくるといえると思います。

話は戻りますが、平易な日本語というのは、今年のNHKが平易な日本語のニュースというのを始めたというのも一つの象徴的なことかなという気がします。さらに、先ほど紹介した介護の識字というのをどう支援するかという地域の試行錯誤というのも、今、始まっています。リテラシー識字について言うと、例えば



日本語で書かれたマンスリーレポート (図3)

これ(図3)はタイの技術者が日本語をゼロから勉強して1年後に書いた月報です。マンスリーレポートです。こういったようなことを、専門的知識を共有する人たちが現場で互いに学び合いながらやっていると、意味についてはわかっている。文脈も現場がある。そうすると、あとは言葉の置きかえ、プラスアルファ、文化的な違いみたいなことが出てくる。私は非漢字圏の人が大人になってから日本人と同じように日経が読めるなんてとても大変だろうとつい思ってしまうけど、決してそうではなくて、興味・関心を共有する人たちが、その現場で互いに学び合いながらしていくということは、リテラシーを身につけていく一つの大きなヒントを与えてくれるのではないかなというのを、看護や介護の人たちの支援をしても思います。

9) 「gated community」⇒「keyless society」

鍵をかけずに、声とことばをかける地域へ

今までの話をまとめます。今、一つは国境等を越えて移動することによって人の言語能力、文化能力、社会能力、体力も含めて衰えていく。これは移動だけではなくて人間の一生の中でも歳をとるということによって人間の能力は変化をしていく。しかし、変化をしていっても言葉や精神的な問題や、それから学習の環境、それから社会制度というのが、いつでも、どこでも、ニーズに応じて学べる環境というのをつくっていくと同時に、できなくても、できなくなっても安心して暮らせる制度をつくっていくということが必要だろうなという気がします。そのことを成長と衰弱という言い方をしています。成長することを支える。衰弱しても大丈夫だというふうに支えていく。そしてそれを、私は、鍵をかけずに声とことばをかけていく地域をつくるという言い方を、最近しています。そういうような地域づくりの、今日は実例というのが、この後に報告されると思いますので、楽しみにしています。

ということで、私の話は2分ほど過ぎてしまいましたが、終わりたいと思います。いつも未完ですみません。私の話は終わりました。ありがとうございました。(拍手)

○司会 春原先生、どうもありがとうございました。先生にはこの後、第2部以降もご登壇いただきます。会場の皆様からご質問もあるかと思いますが、ディスカッションの中で時間を設けたいと思っております。先生、ありがとうございました。(拍手)

第二部

事例発表・パネルディスカッション

1. 日本語学習支援に関わる市内3団体による活動事例発表

ファシリテーター：矢部まゆみ 氏

(横浜国立大学非常勤講師、YOKE日本語学習コーディネート業務アドバイザー)

○司会 では、続きまして第2部事例発表、パネルディスカッションに移ります。ここからはファシリテーターとして、横浜国立大学非常勤講師の矢部まゆみ先生をお願いしております。矢部まゆみ先生は大学において留学生の日本語教育などを担当されるとともに、当協会、日本語学習コーディネート業務アドバイザーとして、横浜市の日本語学習支援に広くかかわっていただいております。

それでは矢部先生、よろしくお願いいたします。

○矢部 バトンを引き継ぎまして、矢部です。よろしくお願いいたします。

早速なのですが、春原先生の基調講演では、今、さまざまなキーワードが出てきました。グローバリゼーションの中の人の移動、そしてリテラシー。そしてどうやって魅力のある地域をつくっていくか、安心して生きていける地域をつくっていくかということで、鍵をかけずに声と言葉をかける地域をというような、さまざまキーワードに結びつけて多文化共生のための日本語教育のあり方を考えるヒントをいただきました。

さて、多文化共生については、さまざまな解釈や使い方があるのですが、現在、横浜市やYOKEが事業を進めていく中では、今回、この資料の中に資料5（注：本報告書p56 多文化共生の定義）として入れてありますような位置づけ、定義で整理をしております。

第2部なのですが、今、横浜で日本語教育にかかわる活動をしている3つの団体から、活動の具体的な状況や特徴を含めて事例発表していただきます。各団体15分の発表の後、壇上で、パネル形式でディスカッションを進め、春原先生にコメントをいただきながら多文化共生のまちづくりにつながる日本語教室の活動とはということを考えていきたいと思っております。この後また第3部では、会場の皆様同士で意見交換をしていただけるようにとも考えています。

3つの団体の概要につきましては配布資料にもありますが、最初の発表が、今、真ん中にいらっしゃいます、国際交流ハーティ港南台さん。会長兼日本語部会長の加藤紀恵様と、それからメンバーのマリアナさんにお話をいただきます。よろしくお願いいたします。マリアナさんはルーマニアご出身で、10年前からハーティで日本語学習を始め、現在はスタッフとして自分自身も新しく来た外国人のメンバーに日本語を教えたり、活動の運営の



事例発表の風景 (写真)

ほうにも携わっていらっしゃいます。2番目は、皆様から向かって右手にいらっしゃいます、ラテンアメリカ青少年の会さん。会の設立者のカルメン・ディアスさん、ペルーのご出身です、と、牧野和敏さんにお話いただきます。通訳の方を交えてお話をさせていただきます。そして3番目ですが、横浜YMCA学院専門学校で、専任講師の平岡守先生にお話をいただきます。

ハーティ港南台さんとラテンアメリカ青少年の会さんは、ボランティアベースでそれぞれに特徴のある活動を展開していらっしゃいます。横浜YMCA学院専門学校さんは日本語学校で、地域の日本語教室とはまた活動の枠組みや形態が異なるのですけれども、YMCAという組織自体が、ともに生きる市民社会の形成という理念を掲げている中で、日本語学校のプログラムにおいても地域社会と連携し、地域貢献、相互理解を進めることを重視した活動の展開を試みていらっしゃいます。

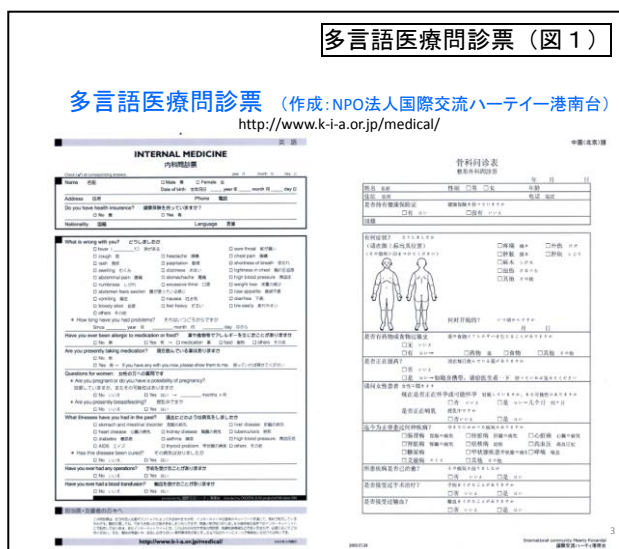
では早速、国際交流ハーティ港南台さんから、お願いいたします。発表時間が15分ということで本当に、まことに申しわけないのですが、時間になりましたらちょっと合図をさせていただくこともあります。限られた時間でたくさんのお話しいただくのは大変心苦しいのですけれども、後でディスカッションの時間が確保できるように、よろしくご協力をお願いします。

ではハーティさん、お願いします。

(1) 特定非営利活動法人国際交流ハーティ港南台 加藤紀恵氏、加藤マリアナ氏

○加藤紀恵（以下、加藤） ただいまご紹介にあずかりましたハーティ港南台会長、加藤と申します。本日は私たちの会を代表して、日頃の活動を報告したいと思うのですが、どうぞよろしくお願いたします。

国際交流ハーティ港南台と申しますが、もう歴史は長く、一昨年度に20周年たちました。もともとの設立の経緯は、日本語が通じなくて困っていた一人の外国人との出会いにありました。病院に付き添っていきますと、まず問診票の記入というのがあったのですが、それが日本語のものしかなく、これが、外国語のものがあればどんなに便利かということから、ないなら自分たちでやろうというふうな感じで翻訳を始めました。そしてい



ろんな方の協力を得て、17言語、10科目の多言語医療問診票というものを完成させました。この（図1）左手にありますのが英語版の内科の問診票。右にありますのが中国語版の整形外科の問診票でございます。そして、あとはそれが2001年になりまして、神奈川県国際交流財団（現 公益財団法人かながわ国際交流財団）のホームページに公開され、今も、誰でも無料でダウンロードして利用できるというふうになっております。

そういういきさつで発足いたしました。やはりコミュニケーションをとるためには日本語が必要ということで、個人レッスンで、当初から日本語は対応しておりましたけれども、設立から5年たったくらいのときに、正式に日本語教室として発足いたしました。活動のミッションは国際交流と相互理解、情報提供とボランティア活動、あとは多文化共生社会の実現を目指すという大きな目標を掲げております。会全体としましては、そういうわけで、日本語だけではなくて理事会、運営連絡会を中心に6つの部会に分かれておまして、日本語部会というのは一つの部会としてこういう位置づけにあります。日本語教室は、週1の2時間、そして場所は民間のマンションの集会室を借りております。ボランティアをしたい人、主に日本人サイドですけども、どなたでも、誰でも受け入れております。日本語に興味のある人は誰でも受け入れております。学習者のほうは、原則は大人ということで、時に子供、夏休みなんかで、アメリカで暮らしている日本人の子供で日本語を教えてもらいたいとか、そういうことも単発的にはありますけど、原則は大人です。そして『みんなの日本語1、2』を使用して、日本語の基礎的な文型の習得を、まず図ります。

あとは、中・上級レベルの人たちのための、一応、修了の年月、年数といえますか、そういうものは決めないで、困っていることがあったら私たちのできる範囲のことで対応しましょうという感じで、中・上級の人たちのためには『みんなの日本語』で、話したり聞いたりすることは勉強いたしますけれども、やはり日本の社会の中で生きていくためには、読み書きというのは必須になってくるとみえまして、一旦、1、2のお勉強が終わった人で、またやっぱり漢字が勉強したいとか、それから学校のお便りが読めるようになりたいということで戻ってきて、そういう方たちの対応のために、新聞の投書欄とかエッセイなどの、生の教材を使って内容を理解、疑問点の意見交換などをするグループもつくっております。そして、あとは10分間の発音練習で日本語の発声を大きい声で、みんなでやります。そしてその後、30分間の対話学習ということを行っております。数名ずつのグループに分かれて、このときはレベル別ではなくて、全部レベルを1つにしまして3つか4つのグループに分かれて、そして外国の方の日本語の上級者をリーダーにして、その人に司会進行をしてもらいながら、どういうテーマでやるかと申しますと、それはそのとき、そのときに担当者を決めておりまして、その人の好きなテーマで話をするのですが、でも、日本で暮らしていく上で必要な情報なんかというのは、特に、やはり対話にならなくてもこちらから情報を教えるという意味で、警察に電話をするときとか、それから消防署のときとか、それから最近のことでは12月にYOKEさんのほうからノロウイルスについてのチラシが送られてきましたので、それを使ってノロウイルスについて勉強し、そして子供たちがそういうものにかかったとき、どういうふうに後片づけ、それから消毒の仕方、そういうものを勉強させていただきました。

そして私たちが一番、今、日本語で力を入れているのはキッズケアということなのです。これは、最初から、やはり私たちのような地域の日本語教室に来るとい学習者さんは子供連れが多かったですね。その人たちをお断りすることができなくて、やっぱり必要で私たちの会にやってきているのだからと、困っている人は誰でもできることを、手を差し伸べるといのが私たちの方針ですから、それでやっていました。ずっとそれは続けておりまして、こういうふうに今の形、去年の4月からなのですがけれども、子供を預かっているだけではなくて、親子で、この時間は10分間だけなのですが、キッズケアの方の協力を得て手遊びをやっているのです。 (写真1)

それから、やはり連れてくるお子さんは、幼稚園の子はもう連れてきませんから、3歳ぐらいまでの子供たちなので集中力が続きませんから、10分間くらいの時間を朝一番の時間に

キッズケアの様子 (手遊び) (写真1)



やって、そして子供もそこで、なれたところでお母さんは学習のほうに入ります。ここのところにちょっと見えておりますけれども、これが仕切りになって、ワンルームなのですね。(写真2)仕切りに卓球台を使っているだけなのですけれども、でも、こちらでお母さんがお勉強していて、



こちらに子供がいるのですけども、何かあったらお母さんの目もすぐに届きますし、子供のほうもママが横にいますので安心して。だから泣き叫んで、うるさくてしょうがないというようなことは全然ないですね。初めは一つの部屋でこんなことをやって大丈夫かしらと思っていただけなのですが、むしろこの形が非常にいい形で進んでいるような気がしております。これが親子の時間、10分間。手遊び、歌、それから紙芝居、絵本。こういうのは図書館で借りて、図書館には非常にこういうものがそろっているそうです。それを借りてきて使っております。

そして先ほど申しあげました対話の時間なのですけども、全員まざった状態で、会話のテーマは昨年度の1月から12月までのテーマを挙げましたけれども、防災と津波、そして警察への通報の仕方、こういった感じでやっております。教室風景はこういう感じ(写真3)で、ここの仕切りの向こうに子供たちがいるということになります。そして1対1のテキストを使った学習はこういう形(写真4)。それから年に2回ほどですけど、お楽しみ会をやっております。全体で輪になって、子供も一緒です。多分、七夕祭りのパーティーだったと思います。ササ飾りをつくった後、みんなで持ち寄りのごちそうを食べて、ここでそれぞれのお国のレシピを交換し合ったりとか、楽しい時間を過ごしております。あとは地域とのつながりも大切と考えまして、港南区ボランティア・フェスティバルには、毎年出場。昨年の11月には日本語の歌を歌いましょうということで「上を向いて歩こう」と、それから「ふるさと」を猛練習しまして、ステージに立ちました。あとは港南ラウンジ(港南国際交流ラウンジ)さんが毎年催していらっしゃるスピーチ大会にも常連の出場者となっております。



こういう感じで楽しく、一番のモットーは、やっぱり困っている人がいたらどなたにでも手を差し伸べるというボランティア精神でやっております。無謀ですけれども、不可能を可能にするという、それで伝統的に、問診票もできましたし、そして今、子育て支援ということも非常に問題になっておりますけど、私たちはやっぱり困っている人に手を差し

伸べるということですずっとやってきております。私の横に控えておりますマリアナさんが私たちの会に、9年間になりますけれども、日本語が全くわからなかったときから私たちのところで日本語を勉強し、今はスタッフとして大活躍、なくてはならない存在となっていますので、マリアナさんのほうから学習者の立場をお話しさせていただきます。

○加藤マリアナ（以下、マリアナ） 皆さん、こんにちは。私はルーマニア出身の加藤マリアナです。よろしくお願いたします。ハーティに9年前に出会いました。初めてのときは緊張しましたが、ボランティアの方たちが親切で安心しました。ハーティの日本語クラスではお金を一切もらわずに、毎週、一生懸命頑張って私たちに日本語を教えてくださいました。日本語のボランティアということを知りまして、とてもすばらしいと思いました。

私の心の中に、ある希望が生まれました。それは日本語が上手になったら私も何かしたい。日本語で役に立ちたい。私より日本語が苦手な人たちの力になりたいということでした。9年間に子供が3人生まれ、子育てで忙しかったのですが、日本語の勉強を頑張りました。すぐ近くに頼れる人が誰もいなくて、ハーティは、私には家族のように思えました。子供3人ともハーティに大変お世話になりました。教室に子供を連れていってもキッズケアのボランティアの方たちが大切に見てくださり、安心して勉強がいつもできました。ハーティのいろんなイベントでは料理や伝統文化も覚えまし、友達もたくさんつくることができました。3年以上前のことですが、男性の学習者がとても日本語が苦手で困っていました。奥様は彼の母国語が得意だったので日本語をほとんど使っていなかったようです。幼稚園の送り迎えのときも、男性がママたちに話しかけたら変だと思われることを心配し、コミュニケーションをとることができませんでした。彼はテキストを使って勉強するのが苦手で、できれば耳で日本語を覚えたい、話せるようになりたいですと言いました。そうだ、私はまだ日本語が上手じゃないけど、彼のために何かしてあげたいと思っていました。ボランティアの方たちに相談しました。そしてボランティアの力をかりて、勉強が終わった後にお話し会を始めました。ランチやおやつを食べながらフリートークの形で気楽におしゃべりし、質問したりされたりしながら、いろんな言葉を覚えていきました。私もとても勉強になりましたし、彼も楽しく参加していました。そのとき、私の心の中の希望が少しだけ形になったのを感じて、とてもとてもうれしかったです。

その後、私はどうしても必要だったので、一生懸命勉強して日本語で運転免許を取りました。そのときに私はお世話になったハーティのボランティアから教えてもらったとおりに勉強し、時間もお金も無駄なく免許を取ることができました。その後、タイ人の学習者に、私も免許が取りたいので教えてくださいと言われました。彼女も一生懸命頑張って日本語で免許を、見事に取りました。今は2人目のロシア人に教えています。最初は無理だなと思ったことも、努力したら無理ではありませんでした。日本語の勉強にもなりました

し、ほかの人の力にもなっているのを感じて、頑張ってたよかったです。

その後、教室の場所が変わったり、勉強の仕方も少しずつ変わってきました。1対1の勉強はずっと続いています。今は30分間の対話のクラスがあります。私は、対話の時間はとてもいいと思います。今はハーティの日本語のクラスが終わった後にボランティアミーティングにも参加しています。ミーティングに出ることになって、いろんなことを聞いたり考えたり話をしながら日本語をたくさん覚えました。ボランティアたちはみんな仲よく何でも相談し、よい結論を出して、家族のようなきずなを感じています。私の意見やアイデアも受け取ってくださっています。例えば、対話のやり方に対して私の考えを言いました。日本語のレベルで4グループに分かれていましたが、私の考えではレベルで分かれるのではなく初級者、中級者、上級者を混ぜたほうがいいと思いました。なぜかという、私が初級者のときに自分より日本語が上手な学習者からたくさん言葉と色々なことが勉強できました。それに、外国人が話した日本語が聞きやすかったし、わかりやすかったです。それで今の初級者の力になれるかもしれないと思ってその意見を出したら、その形を取り入れてもらいました。対話のテーマについても、これからももっと日常生活に役に立つテーマを提案したいと思っています。私の考えでは、よい日本語教室には、もちろんボランティアの力が必要ですが、学習者の意見も大事だと思っています。

ルーマニアのことわざがあります。「右手が左手を洗う。そして左手も右手を洗う」。その意味はお互いさです。ボランティアは私たちのために必死に頑張っています。だから私たち学習者は教わって帰るだけではなく、ボランティアの方たちの力に少しでもなれたらいいなというのが私の考えです。そういう人間になりたいです。

ハーティは私を育ててくれました。これからも頑張りたいです。心からハーティに感謝しております。今日の会場の皆様、どうもありがとうございました。(拍手)

○矢部 マリアナさん、そして加藤さん、どうもありがとうございました。心に響くメッセージでしたね。



(2) ラテンアメリカ青少年の会 カルメン・ディアス・坂本氏、牧野和敏氏

○矢部 では次にラテンアメリカ青少年の会さん、お願いいたします。

○牧野 ラテンアメリカ青少年の会です。私、牧野和敏と……

○カルメン 私はカルメン・ディアス・坂本です。ペルーから来ました。よろしくお願
いします。

○牧野 まず、ラテンアメリカ青少年の会、ラテンアメリカというのはど
かなのかという話から。右のほうに(図
1)南米、アメリカの地図があります
けれども、主に子供たちが多いのは
ペルーとそれから今はボリビアですね。
今までブラジルの方も結構いました。
それからメキシコの方、それからあと
はエクアドル、コロンビアあたりが我
々の活動に参加された子供たちです。



名称はラテンアメリカ青少年の会ということで、Centro Cultural de los Jovenes Latinoamericanosということで、Centro Culturalはカルチャーセンターですね。要するに文化というものを重視した子供たちの会ということです。設立は2000年の9月。活動は学習支援と日本語教室、それから交流イベント等をやっています。学習支援、日本語教室は毎週土曜日の午後、大体2時くらいから5時くらいまで。主な活動場所は桜木町の市民活動支援センターを使わせてもらっています。名称からもわかりますように、設立の目的というのはラテンアメリカの子供たちを対象とした活動をしています。ここにつきましては、設立を、そもそも発案したカルメンさんに話していただいたほうがいいと思います。ここは通訳がつかませんので映画だと思って、字幕スーパーということでご覧ください。

【日本語字幕】ラテンアメリカ人の日本への移住は1990年代に始まり、彼らの多くは家族とともに移ってきました。子どもも大人も、フラストレーションを抱えながら、努力をして、新しい国に適応してきました。子どもたちは、日本の学校へ通い、新しい友達や環境に入って行きます。そして、子どもたちの生活の多くの部分は、異なる言語と文化の中で過ぎていきます。

母語（スペイン語、ポルトガル語）は最小限の表現へと狭められていき、子どものアイデンティティ（言語と文化）を維持する上で大切な年代を、少しずつ失っていきます。その結果として、親子の間のコミュニケーション不足が生じます。そして、年少者たちは、国、家族、友達、そして自分固有の文化、という大きな喪失をこうむることになります。

私は、ラテンアメリカ人に対する情報サービスのボランティアをしていた時の様々な問題に接する経験をしました。家の中では、子どもたちは日本語だけで話し、親たちは、私の場合もそうですが、スペイン語だけ、そうした多くの家族がコミュニケーション不足による諸問題に包まれていました。みんなと一緒に活動を現実のものとする機会を得たとき、私には既に目的がありました。「母語とアイデンティティを維持する重要性を評価すること」

私たちは、その課題の専門家の協力を得て、セミナーを実現しました。その経験は本当にうれしいものでした。ラテンアメリカの様々な国の、年代は12歳から18歳までの、30人以上の参加がありました。このことを私たちはとても肯定的に受け止めました。最初のセミナーは1998年に実現しました。評価は肯定的なものであり、次の年には再度、同様の活動をしました。

子どもや大人の参加者の感想を、完全に憶えています。「なぜ、来年まで待たなきゃいけないの?」「なぜ、もっと頻繁に会えないの?」子どもたちには、会って、おしゃべりしながら、友情をはぐくみ、自分の不安を話す、そうした場を持つことが必要でした。

こうして、私たちの組織ができました。最初の小さな集まりは、部屋がなかったので、海に面した山下公園で開きました。友人や知人たちにも協力も求めました。その時から、長谷川さん、牧野さん、などと一緒に、ラテンアメリカ青少年の会を続けてきました。

（目的は、）言語とアイデンティティの価値を高めることです。子どもや青年たちは、自分のもつ文化的遺産を、対話によるおしゃべりやイベントへの参加を通して維持します。それは未来の市民にとって、自らの人間的・社会的開発の活力になります。彼らが、海の兩岸の二つの文化の懸け橋となることができると、どうして考えないことがあるでしょうか。

【スペイン語】 En los años 90 se inicia la inmigración de Latinoamericanos a Japón, muchos de ellos con su familia. Los niños, y adolescentes con frustraciones y esfuerzo van adaptándose al nuevo país. Asisten a la escuela japonesa y su nuevo entorno (nuevos amigos, tv) en general su vida va transcurriendo en otro idioma y cultura.

El idioma materno (español, portugués) se limita a su mínima expresión, se va perdiendo poco a poco a una edad en que es importante mantener su identidad-idioma y cultura. Como consecuencia se produce la incomunicación entre padres y hijos. Los menores sufren grandes pérdidas, país, familia, amigos, y su propia cultura.

Mi experiencia de voluntariado en el servicio de informaciones a mi comunidad, me puso en contacto con la problemática que envolvía a muchas familias la falta de comunicación

porque en casa los niños solo hablaban japones y los padres como en mi caso solo español. Al presentarse la ocasión de realizar actividades con la comunidad, ya tenia el objetivo: "Valorar la importancia de mantener el idioma materno y la identidad "

Realizamos los seminarios con la colaboración de profesionales expertos en la tematica. Realmente fue muy grata la experiencia contar con la asistencia de mas de 30 participantes cuyas edades oscilaban entre 12 a 18 años provenian de diferentes país de L.A.Lo consideramos muy positivo, el primer seminario lo realizamos en 1998. La evaluación fue positiva y al año siguiente otra actividad similar.

Perfectamente recuerdo, los comentarios de los participantes (niños y adolescentes)" "Porqué tenemos que esperar hasta el otro año " "porque no nos reunimos con más frecuencia?".

Ellos necesitaban tener un espacio para encontrarse y seguir comunicandose, entablar amistad,hablar de sus inquietudes.

Así, se inicio nuestra organización , la primera reunión por la brevedad y no disponer de una sala,la realizamos frente al mar en el parque Yamashita. Pedí la colaboración de amigos y conocidos ,desde entonces Hasegawa san y Makino-san, continuamos en CCJL.

Valorizar la lengua y la identidad que los niños y jóvenes mantengan su "Herencia cultural" a través de charlas diálogos,participacion, contribuyendo a que los futuros ciudadanos conserven su cultura que es vital para su desarrollo humano y social y porque no considerar que ellos pueden ser el "puente de dos culturas de ambos lados del mar.

○**牧野** 字幕を読んでいただけましたでしょうか。

我々が始めたときに、カルメンさんが始められたときに、大きく分ければ2つ、学習支援というのは後から出てくる問題であって、むしろ南米から来た子供たちが、やっぱり母語を忘れてアイデンティティを失っていく。そして家庭の中ではディスコミュニケーションが生まれるのだ、と。そこ

のところを解決するためにこういう交流会を開きたいというのが一番最初のきっかけでした。そういうことで2000年から始めまして、活動の内容としましては交流会、イベントの開催ということで内部講師、外部講師でいろんな話をさせていただいて、それに意見交換をする。それからイベントとしては毎年9月に周年行事、10周年とか12周年とやっているのです。それからあとは各国の独立記念日であるとか、クリスマスなどのパーティーをやっています。学習支援では小中高の生徒を対象にしたマン・ツー・マンの対話をやっています。これと並行して日本語教室も開催しています。

教室の様子 (写真1)



国際交流イベントを、例えばこういうYOKEのイベントでありますとか、いろんなものに行っています。スピーチコンテストで珍しいのは、日本語スピーチコンテストというのはよくあるのですが、我々はスペイン語のスピーチコンテストにも応募していくということで、そういうほうも大事にしております。

我々はこういう成り立ちなので、ボランティアとしましてはほぼこの3種類が3等分いるという感じで、まずラテンアメリカの人たちの大人、つまり子供たちの親たちと、それから卒業世代の親がそのまま加わっています。12年やっていると、高校生だった子がもう結婚して子供が生まれて、子供を連れてやってくる。そして自分もボランティアをやっているという方もいます。それからスペイン語やラテンアメリカ文化に関心がある人ということで、私はカルメンさんのスペイン語教室の生徒だったわけですけど、そういうことで声をかけられてやっているとか。また、イベントに参加してそのままボランティアをされる方。それからあとは海外協力、JICAで外国、南米のほうに行った方が一緒になってやって、ほかの団体とのつながりとか、いろんな運営のこともやっていただいています。それから、逆に我々の活動の経験をもとに、自分も行ってみようということでJICAに応募して、卒業してから行った人もいます。そういう意味で、そういう多彩な経験を持つボランティアと共同して活動を支えている。この写真は学習支援、遊んでいるようにも見えますけども、一応マン・ツー・マンでその子の勉強を見ているところです。

そういうことでやっているのですが、やっぱり子供を、小学校のころから中学校、高校、大学に入る受験まで面倒を見ているから、その成長に合わせていろんな支援内容というものを、それからその子供に合わせた支援内容というものを考えています。それからあとは、12年間、13年目に入るのですけども、やっていると、例えばリーマン・ショックみたいなもので、日本になかなかいられなくて帰ってしまったとか、それから先日の東日本の大震災とその後の原発の問題、そういうもので国のほうに帰られた方もいたりして、参加者というのはかなり変動しています。それから、単に授業を教えるだけではなくて、やはり受験の準備、受験の手続とか、それから進学相談をどうサポートしていくかというのも我々の大きな役割です。

そういう中で日本語のニーズ、日本語教育というのが今日の題なのですけれども、そういう意味でいうと日本語に特化した事業というのをやっているわけではないです。特に、2000年のころは、子どもたちは向こうで生まれてこちらに来た方がいるのですね。だから、日本語が不自由な子供が多かった。ところが、今はほとんどが日本で生まれて入ってきていますから、見た目は日本語が、全く不自由がない。ただそういう子供も受験とか、そういうようなことを抱えてくると、やはり日本語の力というのは非常に弱かったということがわかってきて、そこでその子に向けた支援というものが必要になってくるというふうなことがかなりあります。それから一緒についてくる子供、子供についてくるお父さん、お母さんたち、主にお母さんですね。この方たちが勉強する、待つ時間に日本語教室をやる

うということで、大人向けの日本語教室が、待ち時間の有効活用ということで始まっているようなところですよ。

そういうことを順にやってきた中で、日ごろの活動の中で、留意事項で、運営側の課題としては、子供たちが結構、予定しないで来るわけですね。我々もこの時間帯に来ればいつでも誰かがいますよという受け入れ方をしていますから、そういう意味で、来たときに必ず受け入れられる対応、態勢を整える。それから子供の数とボランティアの数が、きょうはやけに子供が集団で来たけど、ボランティアは少ないとかとなるとなかなか難しい。そういうバランスをどう保つかみたいなことです。それから子供をできるだけ、同じ人が同じく、継続的に見るようにしていますけれども、それができない場合に支援の内容を次のボランティアにどう引き継ぐかというふうなことがあります。それから子供側にもむらがある部分、来たり来なかったりとか受験前だけ来たり、そういうようなところを、やはり継続してやってくることが大切だということをお話ししています。それからやっぱり子供は特に、小学生ですと、桜木町で駅から5分ぐらいですけれども、やはり子供だけではなかなか来られない。そうすると親がついてこれないと子供が休むということになってしまいますから、そういうようなことをどうサポートすればいいかということが、いつも心がけていることです。そういう意味で、我々の特色としては、親にも子供にも参加できるプログラム、それから親と子供と一緒に参加できるイベントとか、そういうようなことを用意して特色を発揮しようということと、それからラテンアメリカと日本人の、両方の多様なボランティアの相乗効果、連携効果というものを生み出していきたいなというふうに考えております。

これからの活動については、これは彼女の言葉ですけれども…

○**カルメン** (スペイン語) Como la vida misma Continuar con el Esperanza y el Esfuerzo (人生そのもののように 希望と努力で活動を継続)

○**牧野** やっぱり本場の人と言うと全然違いますけれども、そういうことで、とにかく我々の活動というのは人生と同じなのだ、と。とにかく希望と活力、希望と努力をもって続けていくことが大切なのだということで、我々はとにかく子供たちの母語とアイデンティティを尊重しながら、そしてラテンアメリカ人と日本人が対等のパートナーで、かつ、ボランティアと子供たちの親が信頼関係を築きながら、交流活動を今後も続けていきたいなというふうに考えております。以上です。(拍手)

○**矢部** 牧野さん、カルメンさん、どうもありがとうございました。

(3) 横浜YMC A学院専門学校日本語学科

平岡守氏

○矢部 では続いて、横浜YMC A学院専門学校、平岡先生、お願いいたします。

○平岡 皆さん、こんにちは。横浜YMC A学院専門学校の平岡と申します。よろしくお願いたします。今日の会は地域日本語教室事例発表会ということで参加をさせていただいておりますが、私どもは地域日本語教室としての活動をしているわけではありません。日本語学校ということで活動しておりますので、ちょっとほかの活動事例とは違うと思うのですが、ご参考にしていただければというふうに考えております。

日本語学校ということなのですが、皆さんのご自宅のお近くには日本語学校というものがありますでしょうか。ご覧になったことはありますか。日本語学校というのは何だというと、日本語を勉強する学校なのですが、私たちが普通、日本語学校ですとか日本語教育機関ですと言うときには、その学校の入学許可証があれば入管から留学のビザがもらえる、そういう学校を日本語学校というふうに呼んでいます。そういう学校が全国に500ぐらい、今、あります。神奈川県にはそういう学校が21、20……。ちょっと数が変わることもあるので、20ぐらいありますということです。ただ、別に日本語を教えてくれるところですよと、学校ですよと場所を構えれば、それはそれで日本語学校だとは思いますが、留学のビザ、留学生が勉強しているという場所が日本語学校だということで話を続けていきたいと思えます。

留学生が勉強しているだけではなくて、当然、地域にいらっしゃるいろいろな外国につながるの方々、そういう方も入学をしてくて勉強されていらっしゃいます。当然、ビザ、正式に言うと在留資格ということになりますが、いろいろな在留資格をお持ちで、ここで勉強したいのですという形で勉強をされているということです。

私たちの学校は設立の母体が公益財団法人横浜YMC Aという団体になります。横浜YMC Aという名前をどこかでご覧になっていらっしゃいますでしょうか。お孫さんがプールに通っているよとか、そういえば隣のうちの子はYMC Aの保育園に行っているわねとか、そういう形で、神奈川県内で活動しておりますので、いろいろなところで出会っていただいているかもしれません。その会の、横浜YMC Aの活動については、毎年のブックレット、活動報告ブックレットというのが出ておりますので、よろしければこちらをご覧くださいというふうに思えます。

それぞれの団体にいろんな目的、それからミッションがあります。私たち横浜YMC Aもミッションを持って活動しております。私たち横浜YMC Aで働いている者が心にとめている、私たちの使命というものです。1番のところに、「異なった文化、民族、思想、信条を尊重し、共に助け合って生きていく世界を築くことにつとめます」というこのミッシ

ョンに基づいて、私たちも25年前から日本語学科を設置して活動しております。

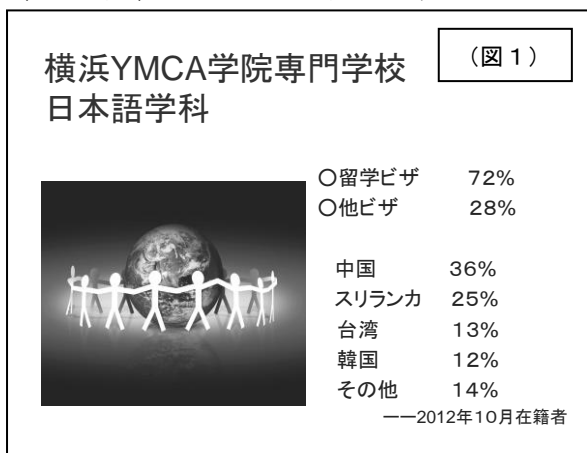
YMCAというのは横浜だけではなくて全国に、世界中130以上の国と地域にあります。日本では11のYMCAが16の日本語学校を運営しております。協力をしていろいろな活動をしておりますが、そのYMCA日本語学校の持っている共通の目標、それがここに出ている目標です。日本語を単に学ぶ、日本文化を学ぶというだけではなくて、国際社会の中で相互理解を促し、ともに生きる社会の実現に貢献する、そういう人材を育てるのだということで、私たちは日本語学校を運営しているということです。

横浜YMCAには、今、日本語教育を行なっている拠点が3カ所あります。一番向こうの上にあるのが、私が勤務しております横浜YMCA学院専門学校日本語学科。これは専修学校の専門課程。わかりやすく言えば専門学校の中に日本語学科という科があります。ここに入学すると専門学校の学生ということになりますので、学生証で映画が安く見られたり、通学定期がもらえて、ということがあります。こちらにあるのは厚木にあります、本厚木の駅から歩いて5分のところにありますYMCA健康福祉専門学校。ここにも2010年から日本語学科を開設しております。そして下にありますのが、YMCA ACTというところにも日本語コースがあります。これは横浜駅の西口から歩いて5分のところにあります。ACTは専門学校ではありませんので、週2回、あるいは週3回というパートタイムの日本語クラスということになります。

では、私どもの日本語学科は留学ビザ、留学の在留資格を持って勉強している学生が現在約72%。現在の在籍数が約75名ですので、その72%が留学ビザの学生です。海外から入国前に留学ビザを申請してやってきます。そのほかに、既にもう日本に住んでいらして、専門学校に入学して勉強する方が28%。日本人の配偶者等、あるいは家

族滞在、定住、永住など、さまざまな在留資格があります。最近ふえてるのは家族滞在と定住者というビザの方です。国籍別でいきますと中国、大陸の方が36%、スリランカの学生が最近ふえておまして25%、そのほかに台湾、韓国、その他のアジアの国々の学生という形の学生の構成になっております。(図1)

私たちの専門学校の中の日本語コースは日本語本科という1年間勉強するコース、それから日本語文化研究科という、さらに1年勉強するコース、どちらも4月と10月、年2回の入学があります。ミニмум6カ月、1年、1年半、2年というところで学習することが可能です。こちらの詳しい内容については、同じ資料、入学要項3というのがありますので、こちらをご覧くださいだと思います。1日50分の授業、5コマ、実施をしております。週25コマ、年間で900コマの時間数で授業を行なっております。普通の日本語学校さん



は午前、または午後の2部制というところが大半ですが、私たちのところはお昼を挟んで午後も勉強するというので、学習時間が長い、それだけ厳しいと言われております。実際にはそんなに厳しいわけではないのですが、と言われております。

そして専門学校の学生とは別の枠で日本語短期集中コース、これは3カ月間、3カ月単位で勉強しましょうというコースを2008年10月からスタートしました。こちらは海外から来る短期滞在の方もいますし、日本に、既に住んでいる方、そういう方を受け入れて実施をしております。3カ月だけのコースで午前中のみ4コマという形で実施をしております。実は3.11の震災後、どこの日本語学校もなかなか学生募集、特に海外からの募集に苦勞しております、厳しい経営が続いております。私どものところも経営の効率化を図るということで、この短期コースは今年度で廃止し、来年度4月からは専門学校の中に、午前のみ授業を受けられる聴講生という形での受け入れを実施していこうと予定をしています。

私たちは日本語を勉強したいという方から授業料をいただいて、その分しっかり勉強していただいて上達していただく。日本語が使えるようになった、できるようになった、そういうことを目的に行なっています。お金を払ったけど上手にならないじゃないかということになると、私どもの学校は立ち行きません。レベルを6カ月ごとに、5つのレベルを設定しています。上のレベルになると日本語能力試験のN1に合格できるような力をつけましょうと、4技能、読む、書く、聞く、話す、全ての技能にわたってバランスのとれたカリキュラムを実施していきますということで、メインテキストで学ぶ部分と、科目として会話、作文、ディベートの授業、口頭発表の授業なども組み込んで実施をしております。

次に、YC Jサポーター制度ということをお話しします。日本語学校は日本語学校なのですが、私たちはYMCAが運営する学校ということで、ボランティアの活動を広げていきたいと思いますということもミッションの一つになっておりますので、日本語学科を支援していただくサポーター、そういう登録制度を設けております。現在、登録いただいている方が70名ほどおりまして、一つはここに出ているチューター活動、「学生の会話の練習相手をしてください。」と、週に1回、1時間から1時間半程度の支援をお願いしています。(写真1) 2番はクラス支援活動。クラスの中に日本人のネイティブの方をお招きして、ビジターセッションをしたり、あるいは面接練習の面接官になっていただいたりということを実施しております。(写真2)

チューター活動の様子(写真1)



クラス支援活動の様子(写真2)



3番目が交流活動ということで、学生と一緒に出かけ、日本文化を体験していただいたりというような交流活動も実施しております。こういうサポーター制度を設けております。今日、何人かのサポーターの方に来てお話を聞いていただいているようで、大変うれしく思います。

私たちは日本語学校を横浜で展開しております。当然、留学以外のビザの方にもたくさん、これまでも勉強していただいています。地域の日本語教室の方ともどんな連携ができるのか、私たちのほうからどういう発信ができるのかということ、今回の機会に伺いたいと思って参加をさせていただきました。

日本語学校って実際はどんなことをやっているの？という、見たことないわという方が大半かと思いますので、2月15日金曜日の午後の2コマの授業を公開させていただこうと思います。どなたでも来ていただいて構いません。本来Y C Jサポーターの方に公開する授業ですが、日本語学科の様子を知っていただくという意味で授業を見ていただけたらというふうに思っています。この方が皆さんいらっしゃると大混乱になりますが、この人はだめ、あの人はオーケーということは言えませんので、どうぞ来ていただけたらと思います。もし人数が多い場合は1つの教室に5分まで、5人まででローテーションしてくださいというお願いをするかもしれませんが、知っていただくいい機会と考えておりますので、ぜひ。お友達を連れてきていただいてもいいのですが、ちょっと難しいですね。どうぞ来てくださいということで、そういう機会を設けたいと思っております。その中で日本語学校の様子を知っていただければということです。

そのほかというところで、2つだけ。1つは先ほども言いました、地域の日本語教室、あるいは、今日、事例発表をされたような団体の方とどんな協力ができるのかということ、これから私たちも考えていきたいということです。それからもう1つは、教室の中に、私たちの学校に在籍していたときにはなかなか学習が進まなくて、この人はなかなか難しいね、困ったねという学習者も、卒業して専門学校へ行ってすごく立派になって、先生、お世話になりましたと言って挨拶に来ることがよくあります。そのように、やはりいろんなことには時間がかかるのだなというふうに思っています。いろんな人生のステージの中で、ボランティアの教室で支えてもらった時期、それから資格を目指して集中的に日本語学校へ通った時期、そういうのがあってもいいのかなというふうに思います。地域で暮らす方の選択肢の一つとして日本語学校を考えていただければというふうに思って、今日はお時間をいただきました。

どうもありがとうございました。(拍手)

○矢部 平岡先生、どうもありがとうございました。

○矢部 皆様、ご発表ありがとうございました。3団体それぞれの取り組みが具体的に伝わってきました。皆様、いかがでしたか。3団体それぞれ違う活動をされているのですが、共通点は日本語学習を、それに特化して、切り離して行うのではなくて、子育てや青少年活動とか、人のつながりや地域づくりといった営みとの結びつきの中で活動を展開していることかと思います。また、特に始めのボランティアの2団体については、日本人イコール日本語を教える人、支援する人とか、外国人イコール日本語をいつも教わる人、支援される人という力関係を固定させていないという点も特徴的ではないかと思います。

2. 講師を交えたディスカッション

○**矢部** ここで春原先生にコメントをいただきたいと思うのですが、先ほどの基調講演の、誰もが安心して生老病死をおくれる社会とか、多文化共生のまちづくりというお話と絡めて、それぞれの団体の事例はどのように見ることができるのでしょうか。お願いします。

○**春原** 言いたいことはいっぱいあるのですが、実は始まる前に、12時に集まって、マリアナさんがお子さんを連れて乳母車を押してこられて、そこで彼女がすごく心配をされていて、「てにをは」に自信がないと。「を」とか「が」とかというのを間違えるんじゃないかとすごく心配をされていて、そんなことは全然気にする必要はないよ、メッセージをしっかりと伝えればいいんだよと話をしていたときに、でもと言って、「地図」と言うと「チーズ」になってしまって、お子さんが、お母さん、それは地図じゃなくてチーズと言っているよと、そういうふうに指摘をするんだそうですね。私たちは、でもそんなのは状況によって地図かチーズかなんてわかるのだからと言うんだけど、恐らく、お母さんの日本語は変というような、そういう、親子って結構、権力闘争の激しい渦中に実はいるのではないかという気がするのです。そういうときに、もしかしたらお子さんのほうが日本語が上手だとか、自然な発音をするとかということは、そうすると権力関係が逆転しているから、むしろ子供にとっては絶好の機会。そうするとむしろ、やっぱりお母さん側の支援が必要で、子供が何て言おうとそれでいいので、むしろ子供をいじめろみたいな、いや、いじめるのは……。子供との戦いみたいな、多分そういう、意外と僕らのちょっと死角でそういう権力闘争が起きていて、そういうときにマリアナさんがお子さんに言われても力強く反抗していくというような、そういう支援、応援も必要かなという気がしました。

もう一つは、やっぱりマリアナさんが、3人のお子さんのお母さんで、昨日お子さんの1人が38度5分でしたっけ？ 熱があって、それがきょうも続いていたら来られるかどうか心配だったんだと言って、その話は、今日ずっと出てきた、子供が来たり来なかったりするとか、そういう、恐らく小さなお子さんを抱えたお母さんはやっぱり非常に、ヴァルネラブルになっているというか、不安定な変わりやすい状況にいる。そもそも、もしかしたらボランティア教室はそういう壊れやすい部分、不安定な部分を中核に抱えているのではないかという気がするのです。であるならば通常の、きちんと路線を決めて計画立ってやるという発想ではなく、私（わたし）的に言うと、最近ちょっと本を書こうと、日和見主義宣言というのを書こうと思っているのですが、日和をしっかりと見て、そのときの日和を見て今日は大雪だねとか、今日はいい天気だねというような、しっかり状況を見て自分たちのやり方を変えていくという発想。雨天決行型ではなく。そういうのが必要ではないかなと、今日お話を聞いていて、矢部さんも今、日本語だけ切り離して特化させて

いないとか、学習だけ切り離して特化させていないという、それを今日聞いていて思ったのは、卓球台で子供とお母さんたちを中途半端に仕切っているスペースをつくる、仕切り切らずに仕切るというような、そういう発想はすごく大事だなと思って、恐らくその発想はレベルで分けないという発想と同じような発想で、さまざまなレベル、能力を持った人たちが混合しているという発想ですね。そういう、今日ずっとこの仕切り切らずに仕切っているというのを、いろんところで、3つの発表を聞きながら思いました。仕切り切らずに仕切る。

もう一つは、ラテンアメリカの話は、お母さんたちが待っているという話。その待ち時間を利用しようかという発想。そういうすき間を利用するという発想というのは、恐らくやってみないと出てこない。初めに何か計画があったりするのではなくて、やっている過程でニーズが生まれてくる。そしてそのニーズに、必要に応える形でまた次の活動、次の事業というのが出てくるという意味では、とりあえずやってみることがすごく大事なのかなという気がしてきていました。創設のときの話で、一回、勉強会だか講演会をラテンアメリカさんがやってみたところ、また来年もしようよと言ったら、来年まで待たないよという話。じゃあとりあえず海の見える公園でやってみようという発想ですね。恐らくそういう必要というのは待たない。手おくれにならないうちに、とにかくやれる範囲でやれることをやる。だから海の見える公園でもいいし。そしてだんだんとその中でやっているうちに新たな事業とか、新たな構成メンバーが生まれてくるというような、とにかく始めてみるというのがとっても必要かなという気がしました。

というようなことでよろしいでしょうか。

○矢部 ありがとうございます。何か、各団体に聞きたい質問とかはありますでしょうか。



○春原 あります。すごく聞きたいことが1つあって、牧野さんの、たしかパワーポイントにあった、「ボランティア不適合者の早期発見と対応」というのがどこかにあって、まずボランティア不適合者というのはどういうのが不適合者なのかということと、早期発見をしてどういう対応をするのかというのはとても重要なテーマなので、ぜひ聞きたいと思います。

○牧野 どういう表現をしようかと、一生懸命パワーポイントをつくるときに悩んだのですが、ああいう表現になりました。具体的な事例としては、今までの中でタイプが2つあるのです。1つは、我々はラテンアメリカの子供たち、結構女の子が多いのです。ですから、そういう方に関心を持たれている方というのがいらっしゃるわけです。ちょっとふらちなこともあったりして、そういうふうなひとはもう、即、断ってやめていただく

というふうなことです。それからもう1つは、我々は市民活動支援センターということで、誰でも来られる場所でやっています。だからその分、非常に開かれていて良い。ふらっと来て、ああ、こんなことをやっているんだと行って来てくれる方、あるいは私もボランティアをやってみようかなみたいなことで来てくれる方がいるのは良い点ですが、ああいう形で利用される方だと、思うのですけども、結構、自由人っぽい方がいらっしゃいます。こういう方がいますと、やっぱり、結構、子供たちが不安に思うような人というのがあるわけですね。だから、やっぱり子供たちが気持ちよく参加してもらおうという視点から、ちょっと、若干、我々の団体に適さないのかなということです。

○春原 そのときには、お引き取り願うのですよね。

○牧野 そうですね。それは非常に難しいです。我々が考えると、何か逆恨みされちゃうのではないかと、いろいろ理屈を言われたらどうしようと。でもこれはラテンアメリカの人と共同作戦でやりまして、自由人のときにはカルメンさんが、その方はスペイン語に関心があるので、彼女がスペイン語でべらべらべらっとしゃべるわけですよ。そうすると、やっぱり自分はちょっと向かないかなというふうなことで、それ以来というふうになったということもあります。

そういう意味で、我々はどうしても、ボランティア団体というのはできるだけいろんな方にボランティアとしても参加してほしいし、確かに手も足りないという部分もありますから参加してほしいのです。でもその視点をラテンアメリカの人たちは、やっぱりきちんと我々の目的はこれで、子供たちを守るためにはこういうことは、ルールは必要なのだということは非常に明確ですので、一緒に対応しているということのできたかなという気がします。



○春原 あとはYMCAで、生活に困らない人、特に経済的に困らない人はいいと思うのですが、日本で生活していて、日本語を何か必要があって勉強したくなって、それも週1回のボランティア教室ではなくYMCAさんのような、集中的にある期間学びたいというときに、生活の保障、ヨーロッパのある国では語学研修期間に生活の保障のお金も出すという補助制度みたいなところがありますけれども、そういう生活とか学費とかというように、奨学金であったり生活の支援金であったり、そういうような体制というか制度というのは何かおありになるのでしょうか。

○平岡 奨学金という言葉がありましたけれども、日本語学校の学生に対して支給される奨学金というのは、私費外国人留学生学習奨励費という日本の政府のお金から出ているも

のがありますけども、これは留学ビザの方だけということで、そのほかでも奨学金というのは、日本語学校に対しては非常に少ないということです。留学以外のビザの方で勉強されている方々も含めて、私たち日本語学科では半年間で6万円という奨学金は設けていますが、学費から見れば本当にわずかな金額、それも、人数も70、80名ぐらいで、半年で2人ぐらいですから、なかなかそういうところがありません。春原先生がおっしゃるように、必要があって日本語を勉強する人たちの経済的なサポートというものがもしできるとすれば、それは本当に素晴らしいことだなと。ずっと長くということではないですね。必要な時期にピンポイントでというようなことがあれば素晴らしいなというふうに思います。

○矢部 ありがとうございます。どうぞ。



○春原 マリアナさんが先ほど、男性の参加者のお話で、ほかのお母さんたちかな、に、こう、話しかけにくいとか、その人が。

○マリアナ 実は話しかけたことがありまして、そのときお母さんたちに、えっ、何この人？みたいな顔をされて、自分は男性なので、女性たちに話しかけたら何か変だなと思って、なかなかコミュニケーションができませんでした。

○春原 こういうボランティア現場は結構、やっぱり、逆に男性のほうが弱者だという部分がある気がして、男性参加者へのケアの仕方というか支援の仕方みたいなのは何か、そういう経験とか……。

○マリアナ まず、男性に見えないこと。男性じゃない男性。それか、逆にしゃべりやすくなるために、じゃあ私を男性と思って、みたいな。私は女性じゃなくて、どれだけ胸がでかくても、そういうのは一切見ないで、私も男性ですよって。できるだけ……。いろいろ話の中で少しかわいそうに見えました。少しかわいそうですね。しゃべりたいです、本を使って勉強するのはできません、僕は頭がばあです、僕は話をして言葉を覚えたいです、話がしたいです、でも機会がありません、みたいな話をして、本当にかわいそうだなと思っていましたし、子供が2人いますので、多分、家庭の中ではいつも彼の母国語ばかり使っていると思います。話の中では。

○春原 もし私とその男性参加者だったら、ちょっと今のマリアナさんの2つの助言は両方とも難しく、私が男性に見えないようにするというのがまず、この頭では難しい感じで、やっぱり女性と見ないで男と見るというのも結構難しいと思うのですが、でもそう言いながら、マリアナさんの言いたいことというのは何となく伝わっていました。

○**マリアナ** だから、緊張しないでできるだけ心をあけてくださいって。

○**春原** そうですね。



○**矢部** 本当にいろいろな要素があって、それをダイナミックにみんなで工夫しながら、これがまた地域の楽しさだなと思います。

では、あとまた幾つかお聞きできたらと思います。一つには、先ほど、ラテンアメリカさんなのですが、母語の保持とかアイデンティティの保持というのをすごく大事にされているお話が出てきました。日本で暮らす外国人にとって家庭の中で母語や母文化を大切にしていくということは、やはりとても大切だなと思うのですね。一方で皆さん、どうでしょう。日本語教室をやっているときに、どうしても、これは全く、善意というか、悪気なく言っていることなのですが、例えば中国人のお母さんがいて、旦那さんが日本人だけど中国語がちょっとしゃべれる。そして子供を子育てしている。そして、ちょっと旦那さんが中国語をしゃべれるから、うちで中国語もしゃべることがあるなんていうと、「日本語の勉強のために家ではなるべく日本語を話しましょう」とか、「中国語は使わないほうがいいです」とか、「子供がきれいな日本語を話せるように頑張りましょう」と、悪気なくボランティアさんが言うてしまうということがあると思うのですが、母親の言葉を身につけていくということは、子供の認知能力の発達のためにも、それから子供と親の関係性の形成のためにもとっても大切なことだと思うのですね。言葉の支援者として日本語を教える人であれば、そこを十分理解しておく必要があるのではないかなと思うのですが、そういったことについてラテンアメリカさんの活動の中ではそれを重視されているわけですが、そういう重要性について何かエピソードとか、ご意見があったらお聞かせいただきたいと思います。

○**カルメン** (スペイン語)

○**通訳** では、まず母語維持の重要性について基本的なことから話したいと思います。世界の全ての言語や文化には価値があります。私はどれがすぐれているとか、劣っているということはないと思います。

日本に暮らすラテンアメリカ出身の子供たちのように、異なる言葉や文化のある国で子供たちが母語を維持するということは、文化やアイデンティティという意義だけではなく、ソーシャルコミュニケーション力、ヒューマンコミュニケーション力という意義において、それ自体の意義があります。そして家族を結びつけるきずなとなっています。そして子供たちの人生や個性や、その子供たちを取り巻く環境という重要な点においても深く入り込んでいます。

自分たちのルーツ、言葉や文化というものを通して家族の深く強いきずなを感じ、維持していくことは、まだ子供たちが幼いとはいえ、彼らが自己評価をしたり異なる文化を尊重するためには間違いなく役立ち、新しい国への相互融合を容易にしていきます。

ラテンアメリカ青少年の会 活動の様子(写真)



子供たちが母語を培えば、その子供の家庭や学校生活やその取り巻く環境において、自分の考えですとか経験を自由に伝える能力となっていくと思います。保護者の使命としてですが、日々きつい仕事であったり忙しい日々であったり、生きていかなければならない困難さというのがあるとは思うのですけれども、コミュニケーションのきずなを子供と維持するために、家庭で親が必要な時間を持つこと、そのことがとても重要だと思います。

言葉と文化は密接に結びついています。文化は歴史、習慣、伝統、先ほど牧野さんが紹介したような、フェスタというか、いろんなイベントをやったりということもありますが、そういうものを通して文化というのは伝わっていきます。そして子供たちのルーツやその母国とも文化ともつながっていきます。

つまり、母語の維持と文化の維持は子供たちに、子供たち自身の自信と信用を与え、異なる世界を知ることができ、また理解ができ、そして異なる文化を受け入れることを尊重していきます。反対に家庭の、家族の中で話す言葉を失ってしまうということは、家族の意義や自分自身の出身国というのを遠ざけたり失うことをもたらし、家族のコミュニケーションを断つこととなります。

最後ですけれども、1999年2月21日に、ユネスコにおいて世界の言語や文化の多様性を促進する目的ということで世界会議が開かれました。ユネスコはこの日を国際母語の日と宣言しました。ですので、私はこの2月21日の記念日に敬意を表します。母語は言語のみならず文化も指すということで、その記念日ということですが、その日に敬意を表したいと思います。

○矢部 ありがとうございます。やはり母語への思いというのがとても伝わってきました。こういったことを考えながら、知っておきながら、今、日本語の支援というのを、私たちはどうしていくかというのを考えていきたいと思います。

こういった母語を大事にするということについては、母語や母文化、ハーティさんのキッズケアでは子供たちとの手遊びをしたり歌を歌ったり、そういうような、私も何回も遊びに行かせていただいているのですけれども、日本語の歌とかをやるだけではなくていろいろな国の言葉をやったり、お母さんの国の言葉をキッズケアの中に入れてたりというようなこともされていますよね。お尋ねしたいのは、どのような工夫をキッズケアでされてい

るのかということ、一言お願いします。

○加藤 たくさんあるのですけれども。

○矢部 子供たちに人気のある遊びとかはどんなものがありますか。

○加藤 手遊び歌とか紙芝居ですね。手遊び歌も、私も時々参加しているのですが。実際にやるのですか？ 「頭、肩、膝、ぼん」とか、それから「いちにのさんの、にのしのご」とか、数字をとか、そういう。

○マリアナ いろんな言葉で。

○矢部 マリアナさんから見るとどのように？

○マリアナ いろんな言葉で、じゃあ、今日はご挨拶しましょうと。日本語で「こんにちは。おはようございます」。じゃあ、中国語で何て言うのですかとか。じゃあ、英語で何て言うのですかとか。たまにやります。

○矢部 そういうふうにお母さんたちが自分の言葉を使うことにも自信を持てるようにとか、そういうことを認められるようにという面と。

○加藤 やっぱりお母さんがそういう日本の、子供たちに知らず知らずの間に教え、子供たちが覚えていること、そういうことがやっぱり外国人のお母さんの場合には欠落しますので、子供が覚えると同時にお母さんにもそれを覚えてもらってというので。だからお母さんも非常に興味を持って参加しています。



○矢部 ありがとうございました。

最後に、3団体の中で、YMCAさんには、日本語学校ならではのプログラムということと、地域の連携ということをお話いただきました。例えば、若くして呼び寄せで来日した子供たちが、今後、進学をしたいというようなときには、日本語学校で学ぶという選択肢もあるというようなことを、地域の活動しているボランティアの方々が、まずは情報として知っていて、子供たちにも紹介できるといいなと思ったりします。そういった情報の共有などのためにどんなことができるのでしょうか。先ほどのサポーター制度の紹介もその一つかとは思いますが、他に何かアイデアがありましたら、お願いします。

○平岡 必要な方がいらっしゃれば、私たちの学校とか日本語学校というところを使っただけなら、あるいはこういうところでこういう勉強ができるよということを外国からいらした方にお知らせいただければとは思いますが、地域の日本語教室それぞれに何かお知らせをお届けするという事は物理的にできないシステムですよ。皆さんの、代表の方のご自宅が連絡先ということになっていますので。国際交流ラウンジ等には、私たちは、入学時期の前にはいろんな資料をお送りしたりしておりますので、そういうところを介して情報を得ていただけたらなというふうに思います。そして、集中的に日本語を勉強して進学とかにつなげたほうがいい時期というものもあるのかなというふうに思いますので、こういう選択肢もあるのだというところをご理解いただけたらというふうに思います。

○矢部 ありがとうございます。選択肢に応じていろいろな対応ができるといいということですね。

では、ちょっとだけ残り時間がありますので、今度は会場の皆様で何かご質問などがありましたら1件か2件、受けたいと思います。いかがでしょうか。この後の会場ディスカッションでも、皆様同士でまた質問などを出していただく時間を設けたいと思いますが、早い者勝ちで聞いておきたいというようなことがありましたら。はい。



○男性A 先ほど先生のほうからご質問があったのですが、ラテンアメリカのほうでは不適合者の早期発見と対応ということで、同じ質問をハーティさんのほうにしたいのですが、ラテンアメリカさんの場合にはつき合いを求めてくる人とか、自由人の雰囲気のある人というので、目的が違う人が来ているのですが、ほかのボランティアグループでは目的は同じなのです。けれど、人が集まると意見が異なりますよね。ボランティア団体の場合には上司がいるわけではなくてなかなかまとめづらいと思うのですが、ハーティさんの場合にはいろいろなやり方で意見が異なった場合に、どういうふうに調整されているのでしょうか。

○矢部 質問は不適合者の話というよりも、意見の調整をどのようにしているかということですね。いかがですか。ボランティアの方々に意見が違ったりしたときに。

○加藤 意見が違ったり？

○矢部 その調整の方法。

○加藤 キッズケアをやるべきとか、やるべきではないということですか。そういうこと

もありましたね。やっぱり子供たちがいたらうるさくてできないというボランティアもいましたし、学習者も、多分そういう人もいたかも知れませんが、私たちがやっぱり一番必要とされているところはそのあたりのお母さんたちかなと思って、子供を連れていかなくて、連れなかったら行ける学校とか教室というのはそのほかにたくさんありますのでそちらに行ってください、やっぱり子供を連れてでも勉強したいという人を私たちがお受けしましょうと。ボランティアも子供連れでうるさいとかできないとか言う人は確かにいました。そういう人たちは自然に離れていったという形になります。だから今、活動している人たちはそういうことに同意して、そして今、私たちが環境を整えるために一生懸命に頑張っていて、今の形だと子供も騒がないですし、お母さんも泣いたらすぐに対処できるという環境にあるので、今のところ特に不満とかはないですね。だから、どうしてもそういう条件で、これしかできないという形なのですけれども、偶然にそれが一番よかったかなという、今、落ちついた状況になっております。

○**矢部** この辺のことは皆さん、それぞれが課題意識を持っていらっしゃると思うので、次の休憩の後の時間にも、また周りとお話していただく機会があるかもしれません。どうもありがとうございました。

それでは、この後、休憩を挟んで第3部の会場ディスカッションに入ります。休憩に入る前にどんな手順でやるかを説明しておきます。まず、よろしければ、会場の皆様に3人ずつぐらいのグループに分かれていただきたいのですが、そのときに、なるべく知らない方、今、近くにいるのは知っていらっしゃる方が多いと思うので、すみません、ちょっと川を越えて隣とか、なるべく初めて会う方が混じるような形でグループをつくっていただけたらと思います。そしてディスカッションの進め方なのですが、まず自己紹介をしていただいて、今回、基調講演そして事例発表を聞いての感想や質問したいことについて、それぞれに話し合ってくださいと思います。それから今回、「A 親子、子育てサポート」、「B 外国人・日本人の相互の学び合い、連携」、「C 学習の選択を広げる連携」、こういったことについても、皆さんの興味が合えばディスカッションを深めていただけたらと思っています。自己紹介をしていただくときに、実は、やっぱり語りたことも多くなってしまうし聞きたいことも多いと思うのですが、ただ、それをやっているとき最後まで1人の人しか話さなかったということもおこってしまうので、1人1分ずつぐらいで、ゲームのように時間を区切りながらディスカッションしたいと思います。休み時間の間に、どうしたら自分の今やっていることを、自分の状況がほかの人にうまく伝わるか、1分ぐらいで言うためにどうしたらいいか、ちょっと整理しておいていただくとありがたいと思います。

○**司会** では、こちらで第2部事例発表およびディスカッションは終了になります。まずは発表者の皆様、どうもありがとうございました。(拍手)

第三部

会場ディスカッションとまとめ

会場ディスカッションとまとめ

○**司会** 皆様、話も弾んでいらっしゃると思いますが、時間になりましたので、ただいまから第3部の会場ディスカッションを開始します。3部の進行も矢部先生にお願いしております。

○**矢部** 皆さん、すみません。話が盛り上がっていて、とてもいいところだと思うのですが、このまま会場ディスカッションに入りたいと思います。

皆さん、グループ分けは大体できましたか、3人ずつぐらい。できているでしょうか。なるべく知らない人、なるべく顔見知りじゃない方で3人。できるだけ3人のほうがいいです。自己紹介をする時間が少なくなってしまうのですけれども、どうしてもだったら4人でもいいです。

では、これから自己紹介タイム。ちょっとゲーム感覚で、1分たったらベルを鳴らしますので、1人1分ずつぐらいで自己紹介をお願いいたします。いいですか。ではいきます。1人目の方、どうぞ。

[会場、グループ自己紹介]

会場ディスカッションのすすめかた

1 自己紹介（1人1分です！）

2 ディスカッション（10分）

内容は・・・

(1) 基調講演／事例発表を聞いての

「感想」「質問したいこと」

(2) 発表に関するテーマについて

- ・ A 「親子子育てサポート」
- ・ B 「外国人・日本人相互の学びあい／協働」
- ・ C 「学習者の選択肢を拡げる／連携」

簡単に、話のポイントをメモします（簡条書きで、十分です）
のらほど、「全体まとめ」で共有します！



○**矢部** では、基調講演の感想、質問したいことです。今、それぞれのグループに一つずつ紙が行っていると思います。それに皆さんで挙げてくださったことを、簡単でもいいです。簡条書き、メモでもいいので、質問したいこと。基調講演や事例発表を聞いての感想とか質問したいことなど、など。書き出してください。

[会場、記入中]

○**矢部** 皆さん、そろそろよろしいでしょうか。今、いろいろお話しいただいたと思いますが、ここで皆さんから出てきた感想や質問をちょっとまとめていきたいと思います。まとめきれんとは思っていないのですが、取り上げながら、どんな話が出てきたかで質疑ができるようだったらやりたいと思います。

いろんな感想や質問が出てきたと思いますが、こういう順番で聞こうと思います。まず「A 親子、子育てサポート」に関する質問や感想が出てきたもの。それから「B 外国人・日本人の相互の学びあい」に関するもの。「C 学習者の選択肢を拡げる」に関するもの。

そして「その他のテーマ」で順番に聞きたいと思いますので、これぞ聞きたいというところ、あとは感想を言いたいというところは早い者勝ちで、1～2点ずつになると思います。

では、まずはAの親子、子育てサポートについて質問、感想。はい、ではここが速かったですね。どんなコメントで。

ディスカッションの風景（写真1）



【参加者コメント1】

○女性A 質問なのですけれども、私のところの日本語教室も、お子さんを連れてきてもお断りしないというのを原則としているのですが、ただ、会議室で囲まれた中で学習サポートをしているわけではないので、子供がすごく、カッターがあつたりとか、いろんな、そういう場所を走り回る。そういうようなときに、ハーティさんの場合のスペースは安全だと思いますが、子供がけがをしたり何か物を壊したり、そういった場合、責任とかそういったことを考えての活動はされていますか。

○矢部 安全管理。ではハーティさん、お願いします。

○加藤 それは一番難しいことだと思います。ただ、横浜市のほうでボランティア保険か何かというのを、確実な、ちゃんとしたボランティア団体がやっている行事で、もしけがをしたときというサポート、それは金銭的なことですけど、それは結構サポートがあります。（注：横浜市市民活動保険）一度もそういう経験がないのでそれを使わせてもらったことはないのですが。あとはもう信頼関係でやっていますから、何かあったときには親の責任ですというものをちゃんと文書にしたもので判こをついてもらって、それで対話にも、今、離れた部屋ではなくて親がすぐに見られる場所でやっていますから、ボランティアも割合と気が楽ですね、その点は。なので、必ずサインしてもらっています。入会したときに、子供を預けるに当たって。

○矢部 もう一つは、たしかハーティさんの中で、キッズケアの決まりとか、今日、本当はちょっと発表していただく時間がなかったのですが、それを外国人の人にもわかりやすい日本語にして、さらにそれも多言語訳を始めているんですけど、それを外国人の、それこそマリアナさんのような方も共同で、一緒に決まりをつくってみんなで分かち合っているとお聞きしました。要は、「このキッズケアはボランティアでやっています。自分の

子供のことはお母さんが気にしててください」ということを理解・了解しておいてもらえるように努力をされているというのが、とても大きいなと思います。

では、次に「B 外国人、日本人相互の学び合いや協働」について。

【参加者コメント2】

○**女性B** こちらの3人から出た質問なのですけれども、レベルをミックスして対話活動されているということだったのですけれども、参加者の方がレベルミックスの対話の中でのリーダーになるとおっしゃられていたのですが、それを、リーダーになる方、上級者の方々は、自分がリーダーとして対話を進めることをどのように感じられているのかということと、あとは、そういうふうに望まない人ですとか、自分は自分の勉強をしたいと思う方はいらっしゃらないのかということ。それから、初級の方がそこに参加されて話の中うまく加わっていくことができるのか。もしできているとしたら、それはどういうふうに行われているのかということをお教えいただきたいと思っています。

○**加藤** 全部、レベルをまぜて対話をやっていることで、それでうまくいくかというような趣旨だったと思うのですけれども、今、こちらのマリアナさんも言うように、やっぱり外国人が、習うほうの立場でいうと、私たちが気づかないようなことに、マリアナさんのほうがよくわかると言うのですね。外国人が困っていることなんかすごくよくわかるし、それと、外国人がゆっくり話をする、自分が聞き取りにくかったようなことがわかっているから、日本人の先生がやるよりいいと言われてたりとかしているのですね。それで、そのリーダー役の人は自分も学びに来ているのと言うのですが、そういった話しかけのお勉強で十分頑張ってくれて、それが自分の勉強になり、それから意欲というか、自分がそれまでは教わる生徒だったのだけど、非常に自信を持って、生き生きとして参加しているということが見られております。

○**女性B** ありがとうございます。

○**矢部** やっぱり初級の人への対応というか、ついていけない人もいるのではないかとのお話です。

○**加藤** そうですね。だから、ほとんどわからない人もいるのですが、1対1のボランティアというのがいますので、その人も一緒に参加しておりますから、後ろから助けてあげて、そしてその日のテーマの理解ぐらいで終わってしまう人もいますのです。だけれども、1対1の、ボランティアさんは、対話のときは自分からの発言は余りないのですけれども、その人を助けながら、こういうことを今話していて、あなたはどう思う？と。そして、そ

ここで筆談なんかで聞き取ったことを、こうこう、こういうことね、そしてその人に発表させる、そういう感じでやっております。だから、特に不満というのは出ていないようですね。ハーティの人が何人か来ているのですが、もっとテキストの勉強をしたいわという人はいませんね。それで、非常に学習者同士の横のつながりも出てきて、みんな、和気あいあい、帰りには同じ国同士の人と一緒に昼を食べたりとか、そういう関係になっていて、むしろいいことのほうが多かったように思います。

○**女性B** ありがとうございます。

○**矢部** さまざまな活動に参加をしていく場があり、それが学習の場にもなっているということですね、上級者にも、初級者にも。

では次。すみません、1個ずつ、とりあえず採用しています。「学習者の選択肢を広げる」とか「連携」というキーワードで、何かそれにつながる質問や感想が出てきたグループはありますか。

【参加者コメント3】

○**男性B** 学習の選択肢を広げるということに該当するかどうか分からないのですが、若い人を増やしたい。そのためにはどうしたらいいかということなのですが、一つには子供さんの世代、大学生とか、そういった若い人が一緒に、教室に参加して、若い人、特に男性なんかを参加させるためにはどうしたらいいか。そこら辺をお聞きしたい。

○**矢部** それは学習者も日本人も？日本人というか何というのでしょうか。

○**男性B** ボランティアですね。

○**矢部** 支援を中心とした側？

○**男性B** 学習者の方は比較的、30代とか若い人が多いような気がするのですが、ボランティアの人に、若い人来てもらおう。

ディスカッションの風景 (写真2)

○**矢部** どうしたらいいか？

○**男性B** はい。



○**矢部** いかがでしょう。春原先生は何かコメントが？

○**春原** いきなり？

○**矢部** 若い人、若者をどう巻き込むか。

○**春原** 多分、制度的な問題があって、例えば韓国なんかに行くと、こういうボランティア教室は圧倒的に若くて、日本だと高齢者が多いですよ、はっきり言って。最近、団塊の世代の男性も相当ふえているけど、やっぱり今までは圧倒的に女性ですよ。でも、韓国なんかに行くと本当に若い連中がいっぱいいて、これが同じ外国人支援ボランティア教室なのかなと思うぐらいですね。ただ、それにはやっぱりいろいろな社会的制度の違いというのがあって、ボランティアをすると単位がもらえとかいろいろあって、企業もボランティアをするとそういう見返りがあるとか。やっぱりそういういろんな制度の違いがあって、ユネスコ（UNESCO）だってもう8年前ですよ、男性の参加をふやすみたいなのことをマニフェストしても、やっぱり国によってもうそんなことはやっているよという国もあれば、日本みたいになかなか……。一番体力もあって働ける世代の、特に、今は男とありましたが、入ってきにくいという。そこを変えるにはやっぱり学校の中で先生たちが意識を変えていって、地域に入っていったり地域で活動するということをきちんと評価していく。もしくは企業が、社員がそういうCSR的な、地域貢献みたいなことをきちんと評価する。勝手に、土日にしてはダメで評価していく。そうすれば、例えば平日の午前中にも、10代、20代、30代の男性でも女性でも、来て、そこでボランティア活動をする。そうするとやっぱり、均質じゃない空間が生まれてとってもいいと思うのですが、それには多分、精神論では無理だと思います。

○**矢部** ありがとうございます。すごく大きなヒントになりましたね。

では次、「その他」たくさんありそうですね。

【参加者コメント4】

○**女性C** 教え方がどんどん変わってきていて、年寄りにはついていけない。教科書を教えるだけではなく名刺一枚から授業をするクラスもある。そういうことをどうやって知ったらいいのか、どう勉強していったらいいのか、どうついていったらいいのかとても知りたいです。

○**矢部** では、「教え方について」、春原先生。

○春原 身丈に合った方法でいいのではないですか。身丈に合った方法で。先ほどレベルを分けずにクラスをつくと、多分そういうのが好きな人、向いている人もいるだろうし、私はそうじゃなくてYMCAに行って学びたいという人もいるだろうし。つまり、そういう選択肢があることが重要であって、一つのボランティアグループで賄えなければ近隣のボランティアグループに行って。だって、はっきり言って、日本語の能力試験のN1を受けたいなんて言う人だって中にはいるわけですよ。だから、そういう選択肢が設けられていることが必要で、同じように、教え方だって、やっぱりいるのですよね、圧倒的に文法が好きな人が。思う存分、あなたはやりなさい。ただし学習者は来ないかもしれないけどというような。と同時に、研修するチャンスがあっていいと思うんですよ。自分の持っている引き出しはすごく自分が受けてきた教育の再生産をしている場合が多いのです。それを変えるチャンスというのを、引き出しをふやしていくチャンスというのがあるべきだし、それは、多分こういう研修会もそういう場になると思うし、それでも変わらない人はどうぞ、と。

○矢部 ありがとうございます。まさしく、このようなつながりをつくっていくために、今、事業を進めております。ぜひ研修会にご参加ください。では、次、先着順でお願いします。

【参加者コメント5】

○女性D 私は母子生活支援施設というところで働いていまして、主にアフターケアを担当しています。なので、日本語の教室の方たちには逆に助けていただき、そういったところを活用させていただきたいと思っている立場の者です。どうしてというと、その世帯の中でも、3分の1ぐらいが常に外国につながる母子なんです。

対象の方の国は、本当に多種多様です。その中で、先ほどからあります、言葉が途中で逆転していってしまっていて、家族の権力ですか、ディスコミュニケーションという言葉が出てきてしまう。これを軽減するためにも、母語とかアイデンティティとか、そういったものを大切にしていく。それからフィエスタとおっしゃっていましたが、そういう交流とかを設けていく。そういうことというのも、こういうディスコミュニケーションを少しでも軽減する方法なのかなとは思いますが。けれども、お子さんとか乳児であったりとか、子供とお母さんの年齢であったり、子供は母語にイメージさえなかったりとか、アイデンティティといっても自分が日本人になって、確かに日本国籍を持っているのですが、でもお母さんは、ゆくゆくは母語でとっていたり、本当にパターンはさまざまです。そういった子供たちがまた日本語教室に習いにいったりとか、お母さんたちが習いにいったとき、それから母子で一緒に行ったとき、いろいろなサポートあると思うのですが、言葉を教えるというところ、プラスのところ、ディスコミュニケーションを少しでも軽減

できるような、それから実際にそういった方たちがいらっしゃったときに、背景とかで困られたりということもあるかと思うのですけれども、その何かヒントというのですかね、ディスコミュニケーションをなくす、親子を学習支援という立場から、何かその母子関係とかなりをうまくしていけるような、そういったサポートにまで及ぶことがあるのかどうかとか。

○**矢部** つまりこういうことでしょうか。日本語教育の支援をするのに、それこそやはり、先ほどお話のあったような親と子のディスコミュニケーションの問題を抱えている方々にたくさん接するということですよ。

○**女性D** そうですね。いずれそれにぶつかるんですね。必ずぶつかるんです。

○**矢部** そのケースに直面したときに、どのように日本語教室につないだらいいかとか、日本語教室ではどういうサポートがされるのであろうか。日本語を教えるだけでなく、ディスコミュニケーションを何か少しでも改善するようなサポートが日本語教室で行われる可能性があるのだろうかということでしょうか、短くまとめると。いかがでしょうか、その辺、会場の皆さんには何かそういったことに関してお知恵のある方はいらっしゃいますか。実際のご経験からとか。

○**女性E** 知恵と言うほどではないのですが、例えばフィリピンのお母さんが子供に、フィリピンの言葉は大切だよ、大切だよ、と言って聞かせても聞きません。私たちだって親の言うことは中学生やそこらのころは聞かなかったものです。やはり他人に言われて、あ、このポルトガル語とかスペイン語とか、家族で使っている言葉は大切なんだ、とわかるものです。親に言われるというのはやっぱりあんまり聞かないものなのです。勉強しろというのと同じように。ですから学習支援の場で私たちマジョリティーのほうが、こういうあなたの言葉は大切なものなんです。でも今は、この言葉は受験では役立たないかもしれない。でも君が高校に行って、大学生や社会人になってからきっとこれは君に役立つし、君だけではなくて日本にとっても、良いことなんだ。つまり、君のように二つの言葉ができることは、とてもありがたいことで、それは文化や経済の豊かさにつながるんだというようなことを、私たちが子供たちに語らなければいけないと思うのです。そしてもう一つ、先ほどあったように、お母さんかお父さんか、どちらになるかわかりませんが、日本語が母語でない親たちのバックアップは、やっぱり私たち日本人がやらなければいけないことだと思います。長い目で見れば、子供たちにとっては日本語を勉強することと同じぐらい大切なことだと思います。

○**矢部** つまり、子供に対しては自分の親ではないほかの大人、ほかの人が、「あなたの言葉は大切なんだよ」ということを言うとか、あとは、子育て中のお母さんについても、あなたの言葉を大事にしていっていいんだよと励ましたりとか、そういうことを周りがしていきましょうということでしょうか。女性Eさんは子供のバイリンガル教育などの専門でいらっしゃるのです、ここでご意見、ありがとうございます。

だんだん終わりの時間になってまいりました。いかがでしょうか。皆さんでいろいろディスカッションしていただけて、何か新しいつながり、発見ができていますかと……。



ではここで、今日参加しての感想を一人ずつ、登壇者の方に伺えたらと思います。では、また発表順でよろしいでしょうか。では加藤さん、お願いいたします。

○**加藤** 私たちの事例発表なのですけれども、ご参考にさせていただきましたでしょうか。YOKEのほうでこういう企画をして、去年から今年、私が参加したのは2回目ですけれども、ぜひ今後も続けていただきたいと思います。どうもありがとうございます。(拍手)

○**矢部** では、ラテンアメリカの会の方。大体、一言ずつ。

○**カルメン** (スペイン語)

○**通訳** 今日、この会に参加してくださった参加者の皆様、そして担当してくださったいろいろなスタッフの皆様、今日は私たちに、私たちの考えですとか、会のことを紹介できる機会を与えてくださって、本当にありがとうございます。

今日、この会場には日本語を教えていらっしゃる先生とか、ボランティアの方がたくさんいらっしゃると思うので、ちょっと一つ、皆様にお願いがあります。子供たちが本当に自分に自信を持つように熱心なサポートをしていただきたいと思います。子供たちが母語や母国の文化に興味を持つように刺激や励ましをいっぱい与えてあげてください。でも、子供たちはいろいろとレベルも違うだろうし、いろいろと興味を持つことも違うと思いますけれども、カウンセリング的な面もあるかもしれませんが、そういうことでもサポートをいろいろとお願いしたいと思います。ただ、本当に言ってほしくないことというのが、ここでは母語を話さないでとかということは、決して言わないでください。やっぱり子供たちが母語を学び、また学んでいき、維持をしていきということが、日本語を勉強する上ですごく役立つことはもちろんですし、子供たちと先生に、そういうことによって新たなきずなが生まれていくと思います。先生と子供たちがお互い、何か同じことに共感するような仕掛けというのも働きかけていっていただきたいと思います。よろしくお願いします。(拍手)

○矢部 カルメンさん、ありがとうございました。では牧野さん、お願いします。

○牧野 今日は母語の大切さというのをみんなで話して、我々もずっと感じてやってきました。我々はある意味で一つの典型的というか、一つの形なのですね。つまり、我々のところに集まってくる子供たちというのはラテンアメリカの子供ですから、基本的にはスペイン語で話すのですね。ですから、我々はその子供たちにスペイン語の、あるいはラテンアメリカのイベントをやったり、あるいはスペイン語で話し合う機会というのが、まさに母語を大切に活動につながるのです。ただ、これはいろんな活動の中で、私たちみたいに、来る方が、一つの言語の活動はすごく少ないわけですよ。多分それは、母語が大切だと言いつつも、なかなかそういう機会は持てないという活動が多いと思うのです。我々も同じで、我々のところに来るとするのは1週間に一遍、真面目に来る子はそうですけど、1カ月に一遍とか半年のイベントのときだけ来る人もいますね。そういう子というのは学校に行けば、大概、中南米の子は1人しかいないのですよ。1人か2人しかいない。だから、母語を話す機会がない。そうすると、親子でどうしているかということなのです。我々のところに来ている2世の子供、2世というのはつまり創立期には親がボランティアでやっていて、そのお母さんが早くして亡くなられて、お子さんが成長し、また自分の小さな子を連れてきている方がいるのです。その人はやっぱり子供に対してスペイン語の勉強もさせているのです。そして我々のところにも一緒に来る。そういう意味で、親が母語を大切に。また、母語が大切だということを、ボランティアみんながそういう共通の認識を持ちながら、それぞれのケースに応じて工夫していかないといけない。これこそできるという方法はないと思うので、我々も一つの典型としてそういう活動を続けていきたいなと思います。以上です。

○矢部 ありがとうございます。今日は具体的な例を示してくださってありがとうございました。(拍手)

○矢部 では平岡先生、お願いいたします。

○平岡 今日は貴重なお時間、ありがとうございました。私にとってもいろいろと学ばせていただく機会になりました。春原先生がおっしゃったように、やっぱり社会、世の中はどんどん変わりつつあるのだなということを実感しましたし、目の前にいる学習者だったり外国につながる方の背景にあるものをよく見ながら、自分の与えられた場というのを、活動を進めていきたいなというふうに思いました。どうもありがとうございました。(拍手)

○矢部 ありがとうございました。最後に春原先生、お願いいたします。

○春原 おもしろかったです。多文化共生と言いながら不適格者は入れない。それは当然ですね。やっぱりそのコミュニティーの目的とか趣旨があるから。それが多分、多文化社会のすごく重要なことで、今日、たまたま多文化共生の定義という紙があるけど、(注：本報告書 p 56 多文化共生の定義) 互いの違いを認め合い、互いを尊重し、対等な関係を

ディスカッションの風景 (写真3)



つくり、社会的なまとまりもつくる。どんな世界だろう。みんなが違うエスニック・ローカルな衣装を着て楽しく談笑しているような風景があるけど、実は、全くそうではないと思うのですね。まさにそのコミュニティーの不適格者はいる。その人にどうやって……。先ほどのカルメンさんの話はすごくおもしろかった。スペイン語でばあっとまくし立てて嫌にさせて、来ないようにする。多分そういう戦略はすごく重要だと思うのです。それこそ知恵ですよ。それから、今日、ディスコミュニケーションの話が出て、ディスコミュニケーションがむしろ常態というか、日常なんです。ディスコミュニケーションはある。たまにコミュニケーションができるときもある、日本人同士でも。というような、むしろディスコミュニケーションを出発点として考えていくということは重要だと思います。その上で、やっぱり選択肢が設けられていて、情報へのアクセスが、問診票ではないけど、できて、そういう中で始められる人から始めていって、やりながらニーズを掘り起こしてつくっていくということがすごく重要で、この定義にある理念を、実際に、ではどんなあり方の社会だろうというのは、恐らく実現しているのが、今日ここに来ている方たちのグループなのだと思うのです。多文化社会というのはどういうのといったら、うちのグループだよと私は自信を持っていいのではないかなと、今日の話聞いていて強く思いました。ありがとうございます。(拍手)

○矢部 ありがとうございます。今日は登壇者の皆さん、春原先生、そして会場の皆様のことばが響き合って、新たなものが生まれているのではないかというパワーを感じています。今日を一つの出発点として、また今後もこのようなネットワーキングや研修会などにもご参加いただければと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 皆様、長時間にわたりおつき合いくださしましてありがとうございました。皆様同士の、本当に活発な意見交換もできまして、時間も足りなかったのではないかと思います。参加された全ての皆様、それから今日、発表者として来てくださった皆様方に、改めてこの場で大きな拍手を送りたいと思います。(拍手)

それでは、これにて横浜市・地域日本語教室事例発表会を終了いたします。

參考資料

参考：多文化共生社会の定義

1) 横浜市都市経営局国際政策室 (2007)「ヨコハマ国際まちづくり指針～国際性豊かなまちづくりを目指して～」p.5 より一部抜粋

— 外国人にとっても暮らしやすく活動しやすいまちづくりについては、以前は「内なる国際化」、また最近では、「多文化共生のまちづくり」、「多文化共生社会の推進」、「地域の国際化」等、様々な表現が用いられていますが、本指針では『国際性豊かなまちづくり』を原則としてつかいます。

本指針においては、『国際性豊かなまちづくり』を、“市内に住む人々が、国籍や民族などの違いを超え、互いの文化的差異を認め合い、地域社会の構成員として共に生きていくような地域づくり、さらには海外からの観光客、業務出張者等の一時的滞在者（外国人登録が必要とならない90日未満の滞在者）にとっても活動しやすい魅力的なまちづくり”として整理しました。—

2) YOKE ミッション・ステートメント (2001)

— 私たちは、国際都市横浜の歴史的・文化的特性を継承しつつ、異なる文化や価値観とともに認め、尊重し合える豊かな社会づくりを目指します。—

3) 国・県・専門家による定義の例

総務省 (2006)「多文化共生の推進に関する研究会報告書 ～地域における多文化共生の推進に向けて～」p.5 より一部抜粋

— 本研究会においては、地域における多文化共生を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義し、(中略)多文化共生を推進していくためには、日本人住民も外国人住民も共に地域社会を支える主体であるという認識をもつことが大切である。—

神奈川県 県民部国際課 (2008)「かながわ国際施策推進指針 (改訂版)」p.7 II 神奈川県の現状と課題 2 課題 (3) 外国籍県民との共生 より一部抜粋

— 国籍、民族、文化の違いを越えて、外国籍県民も地域でとにもくらす一員として、まちづくりや地域づくりに主体的に参加し、言葉の壁などにより不便を感じないで生活できるよう、ユニバーサルデザイン (※) の考え方も踏まえて、ともに生きるための取組みの充実が求められています。

※ユニバーサルデザイン…文化・言語の違い、老若男女といった差異、障害・能力の如何を問わずに誰でも利用することができる施設・製品・情報の設計 (デザイン) のこと。—

石井（2010） p. 27 より抜粋

— 目指すものは言語文化を同じくする集団ごとにある一定の空間領域を相互に侵食しないように棲み分ける「複数の単文化社会（Plural monocultural society）」（Sen, 2006）としての共存ではなく、国あるいは地域としての社会的まとまりを維持しながら、かつ互いが尊重される社会である。—

参考文献

石井恵理子（2010）「多文化共生社会形成のために日本語教育は何ができるか」『異文化間教育』第32号 異文化間教育学会

Amartya Sen（2006）, *The Uses and Abuses of Multiculturalism: Chili and Liberty*. The New Republic, Issue date: 02.27.06

公益財団法人横浜市国際交流協会（2012年3月）

『横浜市・地域日本語教室事例発表会 報告書』（第1回）

<http://www.yoke.or.jp/>

総務省 2006年

「多文化共生の推進に関する研究会報告書～地域における多文化共生の推進に向けて～」

http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf

神奈川県 県民部国際課「かながわ国際施策推進指針（改訂版）2008年3月」

<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/13004.pdf>

横浜市都市経営局国際政策室 平成19年3月

「ヨコハマ国際まちづくり指針～国際性豊かなまちづくりを目指して～」

<http://www.city.yokohama.lg.jp/seisaku/kokusai/coexistence/machiiinkai/machisisin/machi.pdf>

YOKE ミッション・ステートメント

<http://www.yoke.or.jp/>

横浜市・地域日本語教室事例発表会報告書

発行日 2013年3月

編集・発行 公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい 1-1-1 パシフィコ横浜 横浜国際協力センター5階
TEL 045-222-1171（代） FAX 045-222-1187 E-mail yoke@yoke.or.jp

Copyright©2013 YOKE All Rights Reserved.